

赤穂鹽務局

本局之部

赤穂鹽務局本局之部

第一章 鹽田位置、方位及附近ノ地勢、地形

一 赤穂局ニ於ケル鹽田ハ播州赤穂郡ト備前國和氣郡ノ南端海濱ニ沿ヘル一帶平低ナル地域ニ位シ東ハ赤穂郡新濱村ニ起リ西ハ和氣郡福河村ニ至リテ止ム東西ノ延長約三里ノ間ニ跨レリ而シテ從來俗ニ赤穂濱ト稱セラレタルモノハ赤穂郡内ニ位セル部分ノミナリトス

方位 南方ハ海ニ瀕シ東西山ヲ以テ限ラレ北方一帶ハ耕地若クハ人家ニ接シ其ノ面積東西ニ延長シ南北ニ狹シ

地勢 附近ノ地勢ハ西南ノ一部海ニ瀕シ東北西ノ各方面ハ群山ヲ以テ圍繞セラル即西方ノ山脈ハ北方美作ノ國境ヨリ來リ連亘シテ本部ニ至リ鹽屋村ノ西端ヲ馳セテ海ニ盡キ以テ備播ノ國境ヲ形成シ東北ノ山脈ハ播備ノ國境ニ聳ユル船阪峠ニ初マリ本郡ノ中央ヲ貫通シ赤穂ノ東北方那波阪越等ノ諸村ヲ經、東部新濱村ニ至テ海ニ盡キ西南ハ海ヲ隔テ、近ク讚岐國小豆島ト相對シ備前海ト相接ス而シテ源ヲ本國宍粟郡ニ發シ流長約十九里ヲ有スル千種川ハ本郡ノ中央ヲ貫流シ赤穂ニ至テ海ニ注キ自ラ其ノ地形ヲ兩斷シ下流ニ沿ヘル赤穂鹽田地域ヲ東西ニ分割セリ去レハ此ノ下流ニ沿ヘル鹽田所在一帶ノ平地ハ年々歲々千種川ヨリ流レ來ル土砂海底ニ沈積シテ以テ此ノ土壤ヲ構成シタルモノナリカ、ル作用ハ尙ホ今後幾多ノ地面ヲ此ノ下流ニ見ルニ至ルヘキコト想像ニ難カラサル所ナリ

地形 三面山ヲ以テ圍繞セラレ一面亦海ヲ以テ限ラル、ヲ以テ其地境狹隘ニシテ東西延長約二里南北二十丁餘ニ過キス北方ノ山麓ヨリ僅ニ數丁若クハ十數丁ニ亘リテ人家又ハ耕地ヲ距テ、鹽田ノ區域ト爲ル附近ニ高山峻嶺ナク海拔約九百尺ヲ有スルモノヲ以テ附近ノ最高峯トス又森林池沼ナク鹽田區域ノ中央ヲ貫流セル千種川ハ其ノ流長十九里下流ノ廣サ約二丁ニシテ時ニ洪水汎濫シ兩岸ヲ浸スコトナキニ非スト雖モ平時ハ水勢緩漫ニシテ小舟ノ遡上敢テ困難ナラス

第二章 鹽業ノ沿革

正保二年七月淺野内匠頭長直常洲等間ヨリ封ヲ移シ當所ノ領主トナリ爾來淺野家累代心ヲ殖産ニ用ヒタリシカ鹽業ノ發達ハ蓋シ此ノ時代ニ胚胎セリ然レトモ元和六年舊記ニ鹽屋村鹽田三十五町餘アルカ如キ又ハ寛永二十一年(正保元年ナリ)ノ加里屋町(赤穂町)檢地帳ニ鹽濱十七町餘ヲ記スルカ如キヲ見レハ鹽業創始ノ時代ハ遙ニ淺野家以前ニ在リシコト明カナリト

雖モ其ノ開墾時代ヲ知ルコト能ハス

此年八月長直命シテ御崎内浦ノ海面ヲ埋メテ一村ヲ開カシム其海深ク波濤荒シ乃チ大石ヲ投シ大船ヲ沈メ崩潰ノ災ヲ防キ久シクシテ漸ク成就ス又大坂ノ人岸部屋九郎兵衛矢島喜助播洲高砂人今津屋重右衛門等ニ命シ新濱ヲ開墾セシム今ノ新濱村即チ是レナリ

當時専ラ殖産ニ意ヲ用ヒ是等新開鹽田ニ對シテハ四ケ年間運上年貢ヲ免シ其後尙ホ本濱ノ運上年貢ニ比シ三割ヲ輕減シタルノミナラス普請ニ要スル木材葺草等モ之ヲ給シ以テ事業ノ獎勵保護ヲ爲シタリ其ノ後年幾多鹽田ノ開墾ヲ見ルニ至リタルモノ蓋シ偶然ニアラサルヲ知ルヘシ

正保三年新濱村ノ三十郎廓、中濱元沖廓、地濱ノ三廓成就ス乃チ荒井、的形地方ヨリ濱人ヲ招キ移住セシム此年來ル者十一人之ヲ薪濱村ノ開始トス

慶安三年新開墾鹽田ニ對スル運上ヲ一反ニ付開墾落成ノ年ヨリ三ケ年ヲ經テ四ケ年爾後五ケ年ヲ經テ六十匁ト改ム

承應元年十一月藩吏出張シテ新濱村三十郎廓、中濱、地濱ヲ檢地ス此時釜屋數五十二軒アリト云フ

寛文七年新濱村唐船山ヨリ東端ニテ五百二十五間東端ヨリ北端迄八十一間ノ間ニ大堤防ヲ築造ス翌寛文八年尾崎新濱濱人ヨリ仕入銀ヲ出シ之ニ鹽田ヲ開墾ス唐船廓是レナリトス

寛文十一年初メテ鹽問屋ヨリ御札銀(税金)ヲ藩廳ニ徵ス即チ鹽問屋六貫二十匁木問屋ヨリ三貫十匁以上ノ分鹽薪問屋二口合銀二百十枚ニシテ之ヲ兩度ニ上納セシム

延寶四年十一月藩吏出張シテ新濱村諸廓ヲ檢地ス其ノ反別七十五町六反二畝二十七步ニシテ運上銀三十五貫五百二十二匁八分九厘ナリ

此年唐船外廓煙役運上銀始メテ上納ス蓋シ寛文八年ニ新開落成シ爾後運上免セラレ居リタルモノニシテ其ノ運上四百三十匁目ナリシヲ濱人ノ請ニ依リ十二月ニ至リテ二百五十三匁ヲ上納ス

延寶五年唐船外廓煙役銀四百三十匁ト定メ七十五匁ヲ免除シ三百五十五匁ヲ八月(二百匁)及十二月(百五十八匁)ノ兩度ニ上納セシム

延寶八年始メテ鹽奉行及鹽直師ヲ以テ鹽ノ賣買並ニ容量ノ正否ヲ監査ス蓋シ鹽奉行ハ藩廳ヨリ藩士ニ之ヲ命シ鹽直師ハ庄屋

ヨリ濱人中ニ之ヲ命ス此年始メテ鹽一俵ノ容量ヲ定ム

貞享元年此ノ年ニ於ケル新濱村問屋六人ニシテ御札銀三貫二百五十目ナリトス

元祿四年七月更ニ令ヲ發シ鹽一俵ノ容量ヲ改定ス惣濱人中及鹽問屋ヨリ庄屋ニ對シ庄屋ヨリハ奉行ニ對シ各手形ヲ提出シテソノ制度ニ違背セサル旨ヲ誓ヘリ改定容量左ノ如シ

一、荒井俵一俵ニ付 二斗四升入 一、中俵一俵ニ付 二斗入 一、小俵一俵ニ付 一斗三升五合入

此年八月庄屋年寄問屋大工立會シテ鹽計掛併ニ斗掛ノ調査ヲ爲ス此ノ費用ハ之ヲ問屋ニ於テ負擔セリ

元祿六年十月日雇賃銀額及仕給方ヲ定メ

上奉公人 百五十名 前銀七十名 正、二、三 三ヶ月ハ六分 四、五、八、九 四ヶ月ハ七分 六、七 二ヶ月ハ八分

十、十一、十二、 三ヶ月ハ六分トス

元祿九年唐船外廓煙役ヲ増サル

元祿十三年始メ新濱尾崎兩村ニ木直師ヲ置キ尾崎村ヨリ五人新濱村ヨリ四人トシ隔月ニ交代服務セシム蓋シ木直師トハ當時

燃料ニ供セラレタル薪材ノ評價委員ナリ是レ現今ニ於ケル石炭直師ノ濫觴トス

元祿十四年三月領主淺野内匠頭長矩江戶城中ノ變アリ死ヲ賜ハリ家滅ヒ當地ハ公領トナリ脇坂淡路守安照之ヲ預カル其臣石

原新左衛門岡田庄太夫二人代官ニ任セラレ龍野ヨリ來リテ政事ヲ掌ル

元祿十五年永井伊賀守直敬野洲島山ヨリ移リテ當郡ヲ領ス由テ前年來ノ免定ヲ徵シ調査ノコトアリ

寶永元年鹽問屋及木問屋口錢ヲ定ム

鹽 五斗入一俵ニ付 五厘 二斗三四升入一俵ニ付 二厘五毛 一斗二三升入一俵ニ付 一厘五毛

木 代金百目ニ付 一匁八分

寶永三年七月永井加賀守封ヲ信洲飯山ニ移サレ同月森和泉守長直備中西江原ヨリ來リ此地ヲ領ス

寶永四年八月風害アリ十月又震災アリ東濱堤防ノ修理費ヲ鹽問屋ヨリ差出サシム此時出金シタルモノ新濱尾崎兩村二十六軒

アリ藩廳其功ヲ賞シテ兩村問屋株ヲ十六軒ニ定ム從來兩村ニ於ケル問屋株二十一軒アリタリ

寶永六年鹽問屋仕切掛リ物ヲ定ム

江戸俵一俵ノ口錢 五厘 中俵小俵(荒井俵ト云フ)一石(二俵ヲ云フ) 五厘
上荷賃一艘ニ付 一匁八分 御崎神社奉納金 代金ノ萬分ノ三トス

正徳元年江戸俵判制改役ヲ置ク六月藩吏出張シテ新濱村唐船外廓煙濱ヲ改ム蓋シ煙濱トハ調租ヲ要セサルモノナルヘシ

正徳二年三月新濱尾崎兩村ヨリ藩廳ニ請フテ他所ヨリ此地ニ來ル鹽木船ヨリ賣上高ニ對シ百分ノ一ノ川堀銀ヲ徵收シ年々川

口浚渫ノ費ニ充ツ

正徳三年鹽上荷賃ヲ三匁ニ改ム

享保二年六月鹽及木代銀受拂ニ關スル制度ヲ定ム此ノ年新問屋仕切掛リ物ノ額ヲ改定シ

口錢 代金ノ一步八朱 上荷賃 代金ノ三步(柴茅ハ一艘ニ付三匁) 木番賃 一匁 銀欠 上荷一艘ニ付三步トス

享保三年物價ノ騰貴ニ依リ問屋ノ請ヲ容レ口錢ヲ改定シ

鹽 江戸俵一俵ニ付 七厘 小俵 一石(二俵)ニ付 七厘

木 代金ノ二步トス

享保四年新濱尾崎兩村問屋御札銀十割増トシ新銀二百十五匁ト定メラレ問屋中ヨリ諸物價騰貴ノ故ヲ以テ之カ輕減ヲ求ムル

所アリタルモ藩廳遂ニ其ノ請ヲ容レシ

本年問屋口錢ヲ改定シ

鹽 江戸俵一俵ニ付四寶銀 一分四厘 小俵一石ニ付同 一分四厘

木 代金ノ二步六トス

享保五年柴茅ノ仕切掛リ物ヲ改定シ

口錢 代金ノ四步 柴上荷賃 三匁五分 銀欠 二分ツ、トス

享保十年問屋御禮銀ヲ十割増トス

元文五年新規問屋ヲ開カムコトヲ求ムル者アリ從來ニ於ケル十六名ノ問屋ヨリ舊慣ヲ主張シ遂ニ許可セラレシ

延享二年閏十二月新濱尾崎ニ於ケル十六軒ノ問屋ヨリ唐船大工手譜請費ヲ上納ス

寛延元年十月奉公人日雇賃銀ヲ改定シ

頭男二百二十名 日雇八分九厘 一匁二分 濱子五厘トス

寛延二年始メテ加里屋ニ蒞ノ座ヲ置ク

寶曆九年二月京都ノ人八田四郎右衛門ナルモノ資ヲ投シ加里屋濱ノ沖ニ新ニ鹽田ヲ開墾ス同年夏季ニ至リ二戸前ノ鹽田竣成ス今ニ至リ其氏ヲ取リテ八田濱ト云フ

寶曆九年領内尾崎新濱ノ鹽田困窮ニ瀕シタルヲ以テ幕府ヨリ各問屋ヲ救助ス

寶曆十年五月上荷ノ鹽積方ヲ會所ヨリ定ム

寶曆十三年幕府鹽改メヲナスコト、ナル改メノ鹽ハ朱印ヲ付ス此ノ年ヨリ鹽改メ役人アリ

明和二年七月大坂ノ人炭屋治兵衛ナルモノ八田濱ノ南ニ新ニ鹽田ヲ開墾セムコトヲ藩廳ニ請フテ許サル然レトモ資本缺乏シ年ヲ越ヘテ成ラス後加里屋町那波屋彌次郎鹽屋村柴原幾左衛門ニ命シ出金セシメ漸ク落成ヲ告ク今ノ南濱是レナリ

明和五年新濱鹽田調ヲ爲ス其ノ反別七十五町六反二畝二十七步運上銀三十五貫五百二十二匁八分九厘

明和五年十月鹽改方ヲ定メ之ヲ東西兩濱鹽改役人製鹽家及問屋ニ達ス即チ東濱ハ一月中七日西濱ハ八日定日ヲ期シ各濱ヲ巡閱シ升目ヲ改メ一俵五合ヲ欠ク者ハ譴責トシ六合以上ニ涉ルモノハ填補シ格外ノ欠減アル者ハ之ヲ郡奉行ニ申出テ且ツ中札ナキモノハ五俵ノ過料鹽ヲ徵ス而シテ問屋ニ對シテハ五斗入俵升目ノ不平等等ヲ誠メ且ツ元船積入ニ際シ疑二ノ鹽五俵ヲ指出シ升廻シヲ爲サシム内札ハ之ヲ堅四寸許リトシ氏名及升目ヲ記載シ置カシム而シテ右取締ノ爲メ役人ヘノ支度入用ハ惣濱人七步惣問屋三分ノ負擔トス

明和九年十二月ヨリ年々問屋及木宿ヨリ禮銀ヲ徵ス其ノ賦課額左ノ如シ

一、銀百七匁五分 加里屋新開濱鹽問屋禮銀外ニ 二分一厘五毛強

一、銀四十三匁 加里屋新開濱木宿禮銀外ニ 八厘六毛強

一、銀二步 加里屋八田濱木宿禮銀

安永元年十二月始メテ西濱問屋及木宿ヨリ藩廳ニ御禮銀ヲ徵セラレ

安永二年加里屋町南濱始メテ檢地アリ

安永九年藩廳令ヲ發シテ千種川筋高瀬船ノ鹽引積ヲ禁ス

此ノ年十一月鹽改メ方ヲ改定シ之ヲ庄屋ニ達ス其ノ定法左ノ如シ

一 二十日迄ノ立新鹽五合迄ノ欠ハ寬假シ六合以上一升九合ノ欠ハ口打ヲ爲サシメ二升以上ハ之ヲ潰俵トシ且ツ過料トシ十俵ニ一石ヲ徵ス

二 二十一日ヨリ立鹽、古目鹽二升五合迄ハ之ヲ寬假シ二升六合ヨリ三升九合迄ハ口打ヲ爲サシメ四升以上ハ潰シ俵トシ且ツ十俵ニ付二石五斗ノ過料鹽ヲ徵ス

天明五年鹽改役勤方ヲ定メ俵裝鹽製鹽並ニ晝夜ニ拘ラス船積鹽ヲ調査スルト共ニ濱稼人ノ拔鹽等ヲ監視セシム又鹽改メ方ヲ定メ日々改役二人樹取一人ヲ伴ヒ(入船アルトキハ船頭ヲモ伴フ)各釜屋ヲ巡視シ繩闇ヲ以テ拔俵ヲ爲シテ之ヲ檢シ升欠アルトキハ操業中ト雖モ直ニ各俵ニ口打ヲ爲サシム而シテ中札ヲ偽リ若クハ之カ差入レヲ爲サ、ルトキハ十俵ニ付一俵ノ過料ヲ徵ス川口改メノ時ニ當リ欠鹽等アルトキハ當日鹽改役其ノ責ヲ負フ

此ノ時亦西濱ニ於ケル差鹽ノ改法ヲ定メ一升迄ハ口打一升一合以上二升迄ハ過料十俵ニ付二俵二升一合ヨリ三升迄ハ之ヲ潰俵トシ尙内札ヲ用ユルコト東濱ト異ナラス

天明六年鹽屋村鷓和村ニ新ニ鹽田ヲ開墾ス今ノ淺島濱是レナリトス其ノ反別一反三畝九步ナリトス

寛政元年三月本郡那波村ノ人岡田源右衛門ナルモノ資ヲ投シ加里屋町沖手濱五軒前ヲ開墾ス日光濱是レナリ此ノ月本郡鹽屋

村濱野屋幾左衛門外五人ト共ニ江戸濱荒地再墾ヲ藩廳ニ出願シ四月之ヲ許シ吏ヲ派シテ其ノ地ヲ檢セシム

寛政元年藩廳令シテ薪鹽代等御札坐兩替ニ關スル非違ヲ誠飾ス

寛政二年六月濱稼人總代及鹽問屋總代ヲ大坂番所ニ召喚シ鹽業上ノ諸件ヲ取調フ

寛政五年各濱ニ令シ住所不明者ノ釜屋ニ止宿スル者アルヲ禁ス

此年岡賣鹽取扱者ヲ定メ町方ノ外鹽ノ販賣ヲ禁ス

寛政六年大坂ニ仕向ケル鹽賣買ノ法ヲ定ム

寛政七年先是高瀬船鹽積引ノ禁アリ年ヲ經テ其ノ禁漸ク亂レ之ヲ犯ス者多キニ至リタルヲ以テ更ニ鹽賣買者並ニ木問屋ニ令

シテ之ヲ嚴禁ス

寛政九年初メテ古濱鹽俵菰問屋ヲ加里屋町ニ置ク

寛政十年鹽屋村濱人ヨリ各水尾筋浚深ノ土砂ヲ以テ大土手外ノ海面ヲ埋メ鹽田ヲ開墾セムコトヲ請ヒ八月ニ至リ加里屋町民ノ故障アリテ暫ク中止トナリ翌年二月ニ至リ更ニ着手シ其翌年二月ニ至リテ落成ス

文化六年之ヨリ先眞鹽製産ハ之ヲ西濱ノミニ限リ東濱ハ之ヲ許サ、ルノ禁アリ東濱ヨリ差鹽ノ製造ノミニテハ其ノ販路ニ困難ナルヲ理由トシ禁ヲ解カムコトヲ請フ藩廳之ヲ西濱ニ諮ル西濱聽カスシテ故障ヲ唱フ月ヲ渝ヘテ藩廳遂ニ東濱ノ請ヲ納レテ此ノ禁ヲ解ク東濱ニ於ケル眞鹽ノ製産之ヨリ始マル

同年十二月始メテ西濱鹽懸場ヲ置ク

同月始メテ古濱鹽賣捌方ヲ藩廳ノ收納米ニ準シ需用地大坂商人ハ入札拂ノ屋ヲ用ユ之ヲ御産物取扱ヒト云フ

同月鹽改定法ヲ定メ之ヲ令ス

文化六年各濱ヨリ難澁ニ付鹽製造制限ノ願出ヲナシ之ヲ許可ス

文化八年四月領主森越中守忠敬命シテ加里屋町東沖手十三軒前及小内方四軒前ヲ開墾セシム

文化九年初メテ冬期休濱ノ議アリ是ヨリ先キ諸國新ニ鹽田ヲ開墾セシ所多キヲ以テ製鹽ノ供給需用ニ超過シ鹽業漸ク衰頽ノ憾アリ此年下筋ノ濱人此地ニ來リ冬期休濱ノ利ヲ説ク是ニ於テ東西濱人合議決定シ藩廳ノ許可ヲ請ケ翌年一月ヨリ之ヲ實行ス定期業此時ニ濫觴ス其ノ決議左ノ如シ

新濱一月十日迄ノ内 持濱一ツ 尾崎一月十五日迄ノ内 持濱一ツ

ノ内 持濱三ツ

文化十年三月藩廳令シテ江戸表ニ於ケル鹽ノ賣方ヲ改メ從來四軒ノ間屋ヲ一軒ニ制限シ且ツ入札ノ法ヲ用ヒシメ併セテ此ノ地賣捌ノ法ヲモ之ヲ改メムトス鹽問屋及濱人ニ於テ故障アリ遂ニ果サス

文化十年七月令シテ堅ク升目ヲ正サシム

文化十一年先是他國船ニ古濱鹽(眞鹽)ノ賣渡ヲ禁ス此年十月各濱人ヨリ之ヲ禁ヲ解カンコトヲ請フ藩廳其ノ請ヲ容レ他國船ニハ他船ヨリ一割高ヲ以テ賣渡スコトヲ許ス

文化十二年二月相會シテ休濱ヲ規定シ尾崎村六十日新濱村五十日トス

文化十四年加里屋町前川彌太夫藩廳ノ許可ヲ請ケ南濱ノ沖手ノ開墾ニ着手ス此年錢島沖地共開墾ス文政五年ニ至リテ落成ス

文化十一年先是他國船ニ古濱鹽(眞鹽)ノ賣渡ヲ禁ス此年十月各濱人ヨリ之ヲ禁ヲ解カンコトヲ請フ藩廳其ノ請ヲ容レ他國船ニハ他船ヨリ一割高ヲ以テ賣渡スコトヲ許ス

文化十二年二月相會シテ休濱ヲ規定シ尾崎村六十日新濱村五十日トス

文化十四年加里屋町前川彌太夫藩廳ノ許可ヲ請ケ南濱ノ沖手ノ開墾ニ着手ス此年錢島沖地共開墾ス文政五年ニ至リテ落成ス

此年檢地アリ字ヲ前川濱ト云フ

文政二年六月令シテ濱稼定法ヲ定ム其ノ全文左ノ如シ

此ノ年濱稼人前給銀割附ノ法ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、大俵二十三俵三分ノ三 日雇一匁五分 一、同十九俵七分〇六 同一匁四分 一、同十七俵〇六二 同一匁三分

一、同 十五俵二分三三 同 一匁二分 一、同十三俵三分六六 同一匁一分 一、同十一俵六分六五 同一匁

一、同 十俵九分 同 九分 一、同十俵〇一 濱持 一、同九俵三分三三 濱寄

一、同二十三俵三分三 石釜焚 一、同十九俵七〇六 同目代焚 一、同十九俵七分〇六 鐵釜焚

一、同十七俵〇六二 同目代焚

但シ右ハ鹽入銀直立ヲ以テ此ノ俵數ニ乘シ算出スルモノトス

文政四年六月鹽賣捌方ヲ御產物取扱トナスコトヲ停止セラル

文政六年始メテ製鹽燃料ニ石炭ヲ用ユ創始以來唯松薪ヲ用ヒ來リタルモ其價年々騰貴シ費用ヲ増加スルニ至ル此年四月隅備

前瑜伽山ニ鹽業者ノ大會アリ鹽屋村佐兵衛新濱村覺太郎ノ二人之ニ列シ下筋ニ於ケル石炭焚ノ景況ヲ聞知シ歸リテ之ヲ奉

行島田喬ニ稟議シ東西濱人ニ諮ル議數月ニ亘リ遂ニ之ヲ試ムコトニ決シ十月尾崎村與十郎新濱村新次郎ノ二人ヲ選ミテ阿

波國ニ至リ石炭焚方ノ傳習ヲ受ケシム十一月二人歸ルニ及ヒテ同日撫養郡ニ於ケル二人ノ釜焚ヲ伴ヒ歸ル則チ各村一軒宛

ノ釜屋ヲ撰定シ以テ石炭焚ノ利害ヲ試ム十二月ニ至リ焚方ニ着手ス

文政七年正月石炭焚ノ結果良好ナルヲ認メ東西釜屋半數石炭ヲ用ヒンコトヲ出願ス藩吏出張シテ石炭焚ノ製鹽ヲ檢シ自由ニ

賣捌クコトヲ許ス之ヨリ石炭ヲ用ユル者増加シ十數年ヲ經テ復松薪ヲ用ユル者ナキニ至ル是レ我鹽業上ノ一變革ナリトス

文政七年濱日雇釜焚等ノ他國出稼ヲ禁シ以テ此ノ地ニ於ケル製鹽方法ヲ他國ニ傳授スルコトヲ差止ム

文政十年令シテ濱稼人ノ通行者ニ對シ發スル放言雜語ヲ誡ム

文政十一年加里屋町東大土手濱ヲ開墾ス

文政十二年古濱鹽船積引須番ノ製ヲ廢ス

天保元年奥州津輕ノ者鹽業見習ノ爲メ此ノ地ニ來ル

此年七月令シテ古濱鹽販賣上ニ於ケル不正手段ヲ禁ス

天保二年十一月濱稼人定法、鹽取締、鹽諸規定等定ム

天保三年藩廳ヨリ東西ノ濱所ニ命シ初メテ三斗俵ヲ製出セシメ之ヲ大坂ニ發賣セシム

十二月初メテ御產物鹽掛ヲ置ク

此年十一月ヨリ大俵菰目方ヲ定メ三百五十匁トシ二百五十匁ニ達セサルモノハ使用ヲ許サス

天保四年藩廳石炭焚擴メノ功ヲ賞シ當時ノ村役人及當局者ニ賞賜及年金ヲ賜フ

此年初メテ石炭取締ヲ置キ石炭問屋御禮金ヲ徵セララル

天保八年鹽量リニ使用スル樹ヲ一斗、一升ノ二種ト定ム

弘化三年岡賣鹽取扱者ヲ加里屋町ニ於テ十一軒ト定ム

嘉永五年石炭問屋ノ定法ヲ規定ス

嘉永六年始メテ東西濱各町村ニ二人宛ノ石炭值師ヲ置キ濱人ノ中ヨリ之ヲ任ス

元治元年三月鹽屋村柴原幾左衛門其ノ所有鹽田大土手鹽ノ西手折方村地内ニ新ニ鹽田ノ開墾ヲ請フ藩廳之ヲ許ス五月ヨリ着

手ス今ノ西大土手濱是ナリ

慶應三年正月領主森美作守忠典命シテ加里屋町東沖手ノ南端ニ二軒前ノ鹽田ヲ開墾セシム明治三年ニ至リテ漸ク落成ス東沖

手新開濱是ナリ

明治四年先是王政復古ノ事アリ此年領主森忠儀亦藩籍ヲ奉還ス之ヨリ政事及社會ノ組織ニ一大變革ヲ來タシ鹽業亦其ノ影響

ヲ受ケテ舊制古法殆ト廢滅スルニ至レリ

明治十八年東西ニ於ケル四個ノ組合相聯合シテ十州鹽田同業亦穂支會ヲ組織ス

十二月農商務省口永第二四號ノ特達ヲ發シ鹽業制限ノ法ヲ立テシム議論紛々二三有志者ノ慰諭ニ作リ事僅ニ平クヲ得タ
リ

明治十九年十州鹽田組合規約創設會委員ヲ伊豫國松山ニ派遣ス

五月右細編製會委員ヲ神戸ニ派遣ス延業ノ紛議復起ル

十一月特達ノ趣旨ニ遵ヒ十州鹽田組合赤穂支部ニ加盟シ以テ現今ニ至ル
明治二十年三月赤穂支部ノ決議ニヨリ差鹽俵ノ容量四斗ヲ改メテ三斗五升トシ俵ノ編方四封ヲ改メテ量度トス
明治二十二年二月新濱村ハ新濱鹽業事務所ヲ創設シ產鹽ノ賣却及石炭其他諸要品ノ購入並ニ家業上ノ庶理ヲナス
明治三十八年六月鹽專賣法施行セラレ鹽務局ヲ赤穂町ニ置ク

第三章 製鹽方法

甲 鹹水採收 本調査鹽田、赤穂郡鹽屋村字中水尾六番

一 鹽田ノ種類及面積、附一戸前鹽田、釜屋、納屋、鹹水貯藏場、沼井溝等ノ配置 種類 入濱 面積 一町六反九畝十八步内溝渠 一反二畝十八步八合二 外釜屋其他 六畝二十六步

二 堤防ノ面積高低及築造材料

堤防ハ地勢ノ如何ニヨリ大小高低同シカラサルモ外海ニ面スル地ニ外堤ヲ、濬ニ面スル地ニ内堤ヲ築造スルヲ普通トス之カ高低ヲ示セハ左ノ如シ

高敷上	約二間	約二間	約一四間
外堤	約四間	約三間	約三間
内堤	約四間	約三間	約三間

内堤ハ濬ニ面シ暴風怒濤激突ノ虞ナキヲ以テ一段石垣ヲ築造スルヲ普通トスルモ外堤ハ堅牢ヲ謀リ二段石垣即チ犬走ヲ附スル所多シ

築造ノ材料ハ花崗石類似ノ檢知石ヲ用ヒ粘土ヲ以テ間隙ヲ充填スルノ外組朶若クハ木材ヲ使用セス

三 鹽田内溝渠ノ面積、長幅、深淺各溝渠ノ距離 溝渠ハ鹽田ノ區劃地盤ノ關係ニヨリ大小廣狹一樣ナラサルモ普通

八間乃至十間ノ間隔ヲ以テ鹽田ヲ短冊形ニ仕切り而シテ每一筋ノ境界及鹽田ノ周圍ニ溝渠ヲ設ケ潮水誘入ノ用ニ供スルハ

赤穂地方ニ於ケル一般ノ仕組ナリトス

一、溝渠ノ面積 三百七十八坪八合 四、溝渠ノ巾 二尺乃至三尺

二、溝渠ノ個數 九筋 五、溝渠ノ深 一尺二寸乃至一尺五寸

三、一筋ノ延長 約八十間 六、各溝渠間ノ距離 約八間

四 撒砂(鹹砂)浸出装置ノ構造、面積、個數、大小

(一)撒砂 撒砂ノ性質ハ場所ニヨリ多少趣ヲ異ニスルアルモ赤穂地方ニ於ケルモノハ沿岸ノ海底ヨリ採收スル鼠色ノ純粹細砂ニシテ普通之ヲ作土ト稱シ又ハ垂レ滓ト云フ

(二)鹹砂浸出装置ノ構造 鹹砂ニ付着スル鹽分ヲ浸出セシムル装置ヲ沼井(方言之ヲ臺ト云フ)ト云ヒ普通鹽田ノ中央ニ八間乃至十間ノ離隔ヲ以テ施設ス其ノ二個連結スルモノヲ夫婦臺ト稱シ其ノ一個ナルヲ片臺又ハ半臺ト稱ス今之カ構造ヲ説明スレハ先ツ臺ヲ設クヘキ場所ニ臺盛樹ト稱スル方形ノ箱ヲ据ヘ周圍ニ厚サ六寸乃至七寸ニ至ル迄粘土ヲ付著シ其外部ハ土砂ヲ以テ之ヲ堅メ粘土ノ固著スルヲ見計ヒ臺盛樹ヲ拔取り其内部ハ更ニ粘土ヲ塗附シテ離裂ヲ防キ底ノ兩側ニ小石ヲ枕トシ之ニ方一寸角ノ松材ヲ渡シ竹片ヲ其上ニ並列シ菰又ハ藎ヲ以テ之ヲ蔽ヒ而シテ臺ノ外側前面ノ地盤ニ圓形ノ穴ヲ掘リ其ノ内部ハ粘土ヲ以テ之ヲ塗リ臺ヨリ浸出スル所ノ鹹水ヲ受ク此受溜ヲ方言下穴ト稱ス(下穴ハ口徑一尺二寸、底徑一尺、深一尺ニシテ普通容量四斗内外ナリトス)

(三)面積、個數、大小及高低 面積、二百八坪三合 個數、片臺十個 夫婦臺六十五個 大小、片臺一個一坪三合三勺 夫婦臺一個三坪 高低 高サ二尺

(四)沼井ノ配置 沼井ノ配置ハ別圖ノ如ク短冊形ノ中央ニ排列スルモノハ夫婦臺ニシテ周圍溝渠ニ接スルノ場所ニ設ケタルハ片臺ナリトス是レ等ノ配置ハ主トシテ鹽田ノ地形ト操作上ノ便否ヨリ施設セシモノニシテ各鹽田一様ナラサルモ往古ハ一畝ニ付一臺ヲ標準トセシニヨリ臺ノ個數ハ直チニ鹽田ノ反別ヲ推知スルヲ得タリシモ現時ノ實況ニ徴スルトキハ廣キハ六十坪狭キハ四十坪内外ヲ標準トシテ施設セリ

五 鹹砂貯藏装置其他 該當事項ナシ

六 鹹水輸送装置ノ構造、面積及輸送方法

(一)鹹水輸送装置ノ構造及輸送方法 採收セル鹹水ヲ鹹水坪ニ輸送スル装置ハ 一、擔桶ヲ以テスルモノト 二、樋管

ニ依リ輸送スルモノトノ二種アリ是等ハ必竟鹹水臺ノ距離ノ如何ト操作上ノ便否ニ出テタルモノナリトス
 樋管ニ依ル裝置ハ方言之ヲ突返ト稱ス其構造ハ圖ノ如ク縱五尺橫四尺高三尺ノ石臺ヲ造リ其上ニ松製ノ箱ヲ据ヘ之ニ木
 製ノ樋ヲ取付ケ溜ニ注入ノ裝置ヲ爲ス溜ニ集注セシ鹹水ハ更ニ芻釣瓶ヲ以テ之ヲ汲揚ケ樋管ノ作用ヲ以テ製鹽場ナル鹹
 水坪ニ輸送ス木製樋管ノ外全部粘土ヲ以テ築立テ輸送スルモノナリ之ヲ土樋ト云フ

(二)面積 十九坪三合

内譯 突返下臺 約一坪 樋管延長四十間 巾二尺 約十三坪三合 芻釣瓶用地 約五坪

七 採鹹用器具ノ名稱、種類、員數、構造、大小、形狀、效用及使用方方法

名稱	員數	使用方方法
鹹水荷	八荷	鹹水運搬用
鹹水汲込杓	五	沼井ヨリ鹹水ヲ汲ミ取ルモノ
土畚	四	入柄振ニテ鹹砂ヲ入レ沼井臺ニ持込ムモノ
萬畚	五	引濱用(小竹ノ減減甚タシ四畚ニテ一日ニ一回ツ、刺替)
入柄振	四	鹹砂ヲ寄セ集ムルモノ
小立鎌	九	馬鋏ヲ修補スルニ用ユルモノ
濱鋏	五	地盤ヲ掘鑿スルニ用ユルモノ
乃木鋏	四	沼井ノ周圍及溝淵ノ鹽土ヲ修繕スルニ用ユルモノ
穴かき	三	鹹砂ヲ浸出スルトキニ用ユルモノ
杓柄振	四	撒布セル鹽土ヲ均スニ用ユルモノ
穴堀	四	臺ノ内ノ土ヲ掘リ又ハ沼井ノ内ヲ掘リ出スモノ
當子	一四〇	沼井ヨリ鹹水ヲ汲ミ上クル際臺ノ内へ入レ置クモノ
臺盛樹	一	臺ヲ作ルトキニ用ユル型
芻釣瓶	五	引濱又ハ持濱後臺四隅ノ鹽土ヲ撒布スルニ用ユルモノ
引板	四	散布セル土ヲ均一ナラシムルニ板ヲ以テ平スルニ用ユルモノ
小切萬畚	三	臺ヨリ探掘セシ土ヲ粉末ニスルモノ(萬畚ト大差ナシ)
濱鋏萬畚	一	初濱ノ際鹽田地盤ヲ牛馬ニ引カセ掘返スルニ用ユルモノ
臺叩キ	三	臺又ハ沼井ノ中ノ土ヲ掘リ出シタル後ニ用ユルモノナリ
芻釣瓶	一	鹹水ヲ鹹水壺ニ輸送スルニ釣リ上クルモノ
突返	一	鹹水ヲ鹹水壺ニ輸送スルモノ
流シ樋	一	突返シニ付帶スルモノ(木材又ハ土ヲ以テ樋ヲ据ヘ一定セヌ)
はいふご	二	肥土及不用砂等運搬用
下穴	一四二	鹹砂ヲ濾過シテ受溜スルモノ(臺ニ付屬セルモノ)
根太	二二五	臺ノ内ニ三本横タヘ鹹砂ヲ支フルモノ
竹片	七五	根太ノ上ニ布クモノ
臺		鹹水ヲ濾過スルニ用ユルモノ(松板又ハ粘土ニテ造ルナリ)但シ本製造場ニハ粘土ニテ造リタル者ナリ

八 採鹹用器具ノ新訓費及保存期

名稱	新調費	保存年限	備	考
鹹水荷	、七五〇	二ケ年	一荷三斗五升	
鹹水汲込杓	、二〇〇	二ケ年	五升入	
土 畚	、一〇〇	一ケ年		
萬 鋤	、三五八	一ケ年半		
入 柄 振	、五五〇	一ケ年五回		
小 立 鎌	、二二五	一ケ年		
濱 鋤	、八五〇	四ケ年		
乃 木 鋤	、五八〇	一ケ年		
穴 か き	、〇八〇	五ケ年		
杓 柄 振	、二五〇	二ケ年		
穴 堀	、四四〇	一ケ年		
當 子	、〇一五	一ケ年		

名稱	新調費	保存年限	備	考
臺 盛 樹	二、五〇〇	十ケ年		
引 板	、五七〇	半ケ年		
小 切 萬 鋤	、六〇〇	二ケ年		
臺 叩 木	、一六〇	一ケ年		
勿 釣 瓶	、二五〇	一ケ年		
突 返	、二五〇	二ケ年	樹	
流 シ 樋	一、二〇〇	五ケ年		
は い ふ こ	二、〇〇〇	五ケ年		
臺	三、五〇〇	二ケ年	人夫賃粘土運搬費共	
根 太	三、五〇〇	三ケ年	三本	
竹 片	、六〇〇	三ケ年	一臺ニ要スル費用	
	、〇三五	二ケ年		

九

鹹水貯藏装置ノ構造、大小、形狀及其面積

(イ) 鹹水坪ノ構造

鹹水ノ貯藏地ヲ方言つばト云フ一軒前鹽田ニハ二個乃至五個ヲ有スルモノトス其構造ハ圖ノ如ク堤防上釜屋ノ附近ニ長サ三間以上、六間巾三間以上、四間深サ二間以上、三間ノ長方形ナル穴ヲ堀リ周圍及下低ハ粘

力尤モ強キ粘土ヲ以テ幾回トナク打堅メ鹹水漏泄ノ虞ナキヲ認メ其上ニ松若クハ杉丸太數本ヲ渡シ梁ヲ造リ茅又ハ藁ヲ以テ屋根ヲ葺キ下ロシ其葺キ下ロシハ地上ニ接ス屋根ノ中央若クハ其兩端ノ一方ニハ方二尺余ノ出入口ヲ開キ内部ニハ石段又ハ梯子ヲ設ケテ出入ニ便ニス

普通一軒前鹽田ニハ左ノ鹹水坪ヲ有ス

廿五日焚坪 二個 六日焚坪 一個 計 三個

(ロ) 鹹水坪ノ大小、面積及形狀

- 第三號坪 長六間二分 巾二間九分 十七坪九合八勺
- 第四號 長六間三分 巾二間九分 十八坪二合七勺
- 第五號 長六間二分半 巾三間 十八坪七合五勺

形狀ハ圖ノ如シ

十 鹽田地盤ノ構造及性質

鹽田地盤ハ多ク天然盤ニシテ作成盤ノモノハ頗ル僅ナリ然レトモ歲月ヲ經タリシ結果現時ニアリテハ或ハ天然盤モ一種ノ作成盤ノ如キ觀ヲナスニ至レルモノアリ第一層ハ張土ト稱ヘ二寸乃至三寸ノ厚ヲ有シ土砂性ト粘土性ト相半セル細砂ヨリナリ第二層ハこうら土ト稱ヘ其厚サ三寸乃至四寸ニシテ第一層ニ比スレハ其砂利稍々細ク且ツ粘土性ヲ混スルコト多シ第三層ハ一尺乃至一尺二寸ノ厚ヲ有シ粘土性多ク僅カニ土砂性ヲ帶フルノミ第四層ハ天然層ニシテ全ク土砂性ヲ有シ諸種ノ貝殻等ヲ交ユ而シテ其最モ單純ナルモノニアリテハ第一層ノ厚サ僅ニ一寸五分乃至二寸第二層ノ厚サ二寸乃至四寸ニシテ第三層ヲ有セス直ニ天然層ニ至ルモノアリ前者ハ普通上等鹽田ニ多ク後者ハ下等鹽田ニ多シトス而シテ後者ノ鹽田ニ於テハ常ニ過乾ニシテ鹽分ノ附着僅ナルヲ以テ羊齒ノ束ヲ第二層ニ並ヘ以テ一ノ滲層ヲ形成シ之ニ第一層ヲ張り詰メ以テ海水ヲ鹽田面上ニ及ホス浸透作用ヲ可良ナラシム

十一 撒砂(鹹砂)ノ種類、性質

撒砂ハ赤穂濱固有ノモノニシテ他地方ヨリ移入使用スルモノナシ方言之ヲたれかすと稱シ三種ニ區別セリ即チ左ノ如シ

- 一、粘土性ナルモノ
 - 二、土砂性ナルモノ
 - 三、粘土及土砂性ナルモノ
- 粘土性ナルモノハ細砂ニ粘土ノ混合セルモノニシテ其性粘力ニ富ミ乾燥スルニ從テ凝着ノマ、團塊トナリ鹽分ノ附着面積ヲ少ナカラシムル傾キアリ且ツ鹹水ノ濾過遲緩ナリ土砂性ノモノハ之ニ反シ其質粗鬆ニシテ土砂多量ヲ占ム撒砂ハ長日月使用スルニ從テ漸次其質ヲ變ス而シテ撒砂種類ハ一ニ地盤ノ構成ニ關シ固ヨリ一ナラスト雖モ近來一般土砂及ヒ粘土性ノ相混交セルモノヲ採用スルモノ多シ要スルニ撒砂全ク粘土性ナルトキハ鹹水ノ濾過ヲシテ遲緩ナラジメ且ツ採鹹水ニ有機物ノ含有ヲ多カラシムルモノトス

左ニ產地ヲ記ス

- 一 粘土性ナルモノ 錢島新水尾ノ口ニ至ル海底一帯
 - 一 土砂性ナルモノ 網崎ノ西方海底
 - 一 粘土及ヒ土砂性ナルモノ 大土手濱ヨリ前川濱ニ至ル一帯ノ海底
- 十二 撒砂(鹹砂)撒布量及替砂ノ數

(イ) 撒砂量 一坪ニ付五升六合乃至六升二合 撒砂一升ノ量五百五十匁乃至六百五匁撒砂ノ量ハ夫婦臺一個ニ付四石五斗乃至五石トス臺一個ノ撒布スヘキ面積ヲ約八十坪トシ計算ス

(ロ) 撒砂ノ増減 季節ニ依リ分ツトキハ夏時ニ於テハ約一割ヲ増シ冬期ニ於テハ約一割ヲ減ス

(ハ) 替砂數 二回

十三 撒砂乾燥ノ時間

撒砂ノ乾燥ハ普通二十四時ニシテ採鹹當日ノ午後一時ニ撒砂シ翌日午後一時前後ニ集砂スルヲ以テ季節ニヨリ時間ニ長短ナキモ日光ニ曝露スルノ時間ハ夏期ト冬期ニ於テ甚シキ差違アリ是ノ差違ハ鹹砂ノ乾濕ニ關係シ從ツテ鹹水ノ濃薄ニ影響スルモノトス

十四 撒砂浸出装置ニ注入スル海水量及鹹水量

夫婦臺一個ニ注入スヘキ海水 七斗 同もんだれ 五斗六升 此鹹水 八斗 比重十八度

十五 海水、鹹水及もんだれノ性質

區別	採收地名	鹽化曹達	鹽化加里	鹽化苦土	硫酸石灰	硫酸苦土	温度	比重
海水	赤穂郡加里屋町字前川	二二三三	〇一一三	〇一七三	〇、〇九三	〇、二七〇	一〇、五	B 三、四
鹹水	鹽屋村ノ内鹽屋中溝尾二番	一四、五〇二	一、九五三	一、四〇六	〇、二九三	二、二三三	一〇、五	B 五、三

備考 本表ハ明治三十九年三月採收セシモノヲ分析セルモノナリもんだれノ成分ハ調査中

十六 海水引入、排出、海水汲揚装置及汲揚方法

リ其出入ヲ自在ニス此水閘ノ開閉具ヲ方言蜂ノ子ト云フ 海水ノ引入及排出ハ圖ノ如ク堤防内ニ於ケル同一水閘ノ開閉ニ依

水閘ノ製造ハ稀ニ木製ノ樋管ヲ用ユルアルモ土管ヲ堤防内ニ伏セ若クハ外海ニ联接セシムルモノ多シ

海水汲揚方法 該當事項ナシ

十七 海水貯溜池ノ有無

該當ノ事項ナシ

十八 一ヶ年平均鹹水採收量及月別採鹹量

月次	三十八年				三十七年				三十六年				
	探鹹量比重	採鹹量	比重	探鹹量	比重	採鹹量	比重	探鹹量	比重	採鹹量	比重	探鹹量	比重
一月													
二月													
三月													
四月													
五月													
六月													
七月													
計													

十九 鹽田一戸前採鹹ニ要スル人夫ノ種類、名稱、員數及賃銀

名稱	員數	三十八年				三十七年				三十六年					
		給金	手當	給米	合計	給金	手當	給米	合計	給金	手當	給米	合計		
頭	一	一一、五〇	一、〇〇	九三、〇〇	一〇六、八〇	一	八、二四	六、五〇	三三、七六	四〇、七〇	一	七、二五	六、〇〇	二五、〇六	三三、九〇
上日雇	三	一一、五〇	一、〇〇	三三、四〇	五〇、九〇	二	七、二五	六、〇〇	二五、〇六	三三、九〇	一	六、三〇	五、〇〇	二二、九六	二九、七〇
一匁四分	二	一〇、六〇	一、〇〇	三五、四〇	四六、七〇	一	六、三〇	五、〇〇	二二、九六	二九、七〇	一	六、三〇	五、〇〇	二二、九六	二九、七〇
一匁二分	一	九、二〇	八、〇〇	三三、八〇	四三、〇〇	一	六、三〇	五、〇〇	二二、九六	二九、七〇	一	六、三〇	五、〇〇	二二、九六	二九、七〇

二十 鹹水採收時季及ヒ採鹹量ト風位トノ關係

嚴冬ノ季節ニ至レハ鹹水ヲ採收スルコト尠キカ故ニ休濱ヲナシ毎

年二月中旬ヨリ鹹水ノ採收ヲ初メ十二月ニ至リテ之ヲ止ムルヲ例トス而シテ鹹水ノ量ハ季節ト天候トニヨリ支配セラル、
 モノニシテ盛夏ノ候ニ至レハ其量モ亦増加スルモノトス亦穂濱ハ東北西ノ三面皆山ヲ以テ圍繞セラレ山脈ヨリ僅カニ數町
 ヲ隔テ直ニ鹽田トナリ南東ノ一端開ケテ海ニ面シ其形竈ノ如ク風位ハ春季ヨリ夏季ニ亘リテハ西南風ニシテ秋季ハ西及ヒ
 北ノ風多ク冬季ニ至レハ全ク西風トナル從テ北及ヒ西ノ風ハ毫モ鹽田面上撒砂ノ乾燥影響ヲ來スコトナク唯南東風ノミ乾

燥蒸發ヲ促進シ鹹砂ニ鹽分ノ附着増加ヲ見ルニ至ルモノニシテ漸次夏季ニ至ルニ從ヒ南東ノ風吹キ初メ採鹹ノ好季節タル
 八九月ノ候ニ至ルニ從ヒ赤穂濱ハ常ニ此天與ノ恩惠ニヨリテ鹹水ノ增收ヲ來タスモノトス然レトモ其風位ト採鹹量トノ關
 係ヲ數字のニ表示スルノ材料トシテハ未タ之カ調査ヲナサ、ルヲ以テ茲ニ之ヲ記述スルコトヲ得ス

二十一 一ヶ年ノ採鹹平均日數

區分	三十六年		三十七年		三十八年		平均	
	持濱日數	準備日數	持濱日數	準備日數	持濱日數	準備日數	持濱日數	準備日數
一								
二								
三								
四								
五								
六								
七								
計								

二十二 一ヶ年間平均鹹水採收量

區分	三十六年		三十七年		三十八年		平均	
	持濱日數	準備日數	持濱日數	準備日數	持濱日數	準備日數	持濱日數	準備日數
一								
二								
三								
四								
五								
六								
七								
計								

備考 本調査ハ三十六、三十七年平均ニ依ル

二十三 採鹹ニ關スル操作

(イ) 事業開始前及鹽田ノ雨後ニ對スル準備操作 事業開始前ニ於ケル準備操作トシテハ年ノ一月末ヨリ器具器械ノ新調

ヨリ溝渠ノ浚渫等ニ着手シ三月上旬ニ至レハ持濱三日前ヨリ引濱ノ操作ヲナス

雨後ニ對スル準備操作トシテハ持濱前日ニ引濱ヲナスノミ

引濱トハ刃木鍬ヲ以テ臺ノ四隅ヲ搔キ馬鍬ヲ以テ鹽田面ニ固着セル作土ヲ搔起シ縦、横、斜ニ都合五回ノ引鍬ヲナシ更ニ

引キ均ラシ翌日持濱ヲ爲ス、準備操作ヲ引濱ト云フ

(ロ) 持濱引 濱操作終レハ濱寄セ即チ集砂ノ操作ヲナシ之ヲ沼井ニ持込ミ臺中ノ鹹砂ヲ踏ミ均ラシもんだれ及海水ヲ注

入シ鹹水ヲ採收ス之ヲ持濱ト云フ (此收容濾過セラレタル作土ハ翌日臺ヨリ掘出シ臺ノ四隅ニ積置キ第三日目ニ田面ニ

撒布第四日目ニ再ヒ收容濾過セラル、ノ順序トナル)

持濱ニ三種ノ法式アレトモ大部分ハ第一ノ方法ヲ用ユ

第一、日持 一軒前ノ鹽田ニ毎日操作ヲ施シ日々採鹹ス

第二、替持 一軒前ノ鹽田ヲ中央溝渠ニヨリ區分隔日ニ採鹹ス

第三、三ツ持 一軒前ノ鹽田ヲ三部區分三日目毎ニ採鹹ス

二十四 鹹水採收ニ關スル其他ノ事項 特記スヘキ事項ナシ

乙 鹹水熬煎

一 釜屋ノ構造

釜屋即チ製鹽場ハ普通間口奥行五間半(六間ノモノモアリ)高サ二十尺ニシテ鹽田面ヨリ六七尺以上

ノ堤防上ニ建設セラル而シテ其多クハ東向トス是レ居出ノ位置ヲ屋内南側ニ設クルト操作上ノ便益上ヨリ來リタルモノニ

シテ稀ニハ其方向ヲ異ニスルモノアリ側壁ハ粗雜ナル壁ヲ塗り外面ニハ壁ノ頂上約二尺ヨリ以下ニ腰板ヲ打付クルヲ常ト

ス腰板ハ燒板、古船板、割竹及ヒ杉皮等ヲ用井其多キハ燒板ナリトス而シテ正面及ヒ側面ニハ各三四尺ノ入口ヲ設ケ入口ハ

板戸ヲ用フ尙ホ藁藁ヲ垂レテ之ヲ掩フ

屋根ハ茅又ハ藁ヲ以テ葺キ一尺ニ付八寸位ノ勾配ヲ以テ四方ニ垂下ス而シテ間々屋上ヲ土ニテ塗レルモノアリ之レ往々低

キ煙突ヨリ逸出スル火焰ノ爲メ火災ヲ來タス虞アルニ依ル亦屋上ノ兩端及ヒ釜ノ直上ニハ口ヲ開キテ換氣裝置ヲナス之ヲ

「湯氣抜き」ト云フ「湯氣抜き」ハ板ヲ以テスルモノト藁ヲ以テスルモノトノ二種アリ而シテ其周圍ノ管狀部ヲやぐらト云フ

内部ノ構造 竈ハ釜屋内約中央部ニ於テ高サ地盤ヨリ一尺二三寸縦一丈一尺五寸、幅七尺五寸ヲ占領シ且ツ前壁中央部ニ焚口ヲ有スルヲ以テ火口地盤ニ接スル所ヨリ前方ニ幅一尺長サ六尺釜下ノ中央ヨリ連絡シテ約四尺ノ深サヲ以テ前方ニ延長スル溝狀ノかす出シ場ヲ具フ之レ焚殻ヲ搔出スルニ便ナラシムルト共ニ石炭燃焼ヲ助クルノ送氣口トヲ兼ヌルモノトス竈ノ左側ニ約三四尺ノ間隔ヲ有スル幅五尺、長約三尺ノ居出ヲ縦ニ設ク竈ノ後方煙道上ニハ二個ノ温メ釜ヲ架シ煙道ハ尙ホ後方ニ直進シテ釜ノ後方外ニ或ハ左折スルカ又ハ右折シテ釜屋ノ側方外ニ至リ煙突ト連ナル

釜屋正面入口ノ右方隅成ハ左方隅ニハ約二坪ノ石炭置場ヲ備フ竈ノ左右壁ニ接シテ煎熬用諸器具ヲ置クノ場所トス更ニ其後方隅ニ於テ間口三四尺奥行一間計リノ廣袤ヲ有スル煎熬夫寢室ヲ設ク

温メ釜後方ニ濾過池アリ之ヲ濾シ穴ト云フ之レ鹹水溜ヨリ粗塵ヲ去リタル鹹水ヲ導キタル鹹水溜ニシテ汲杓ヲ以テ之ヲ濾過槽ニ汲ミ入レ濾過セラレタルモノハ後方ノ温メ釜ニ入ル、ノ裝置ヲナスモノトス濾過池ハ略ホ楕圓形ニシテ長サ六尺幅四尺深サ四尺アリ筵ヲ以テ縦ニ中央部ニ於テ分割セラレ半面ニ砂ヲ充タセル濾過裝置ヲ有シ鹹水溜ヨリ誘致セラレタル鹹水ハ此處ニ於テ濾過セラレテ他ノ半面ニ充タサル此ノ如キ濾過池ノ設備ナキモノニアリテハ鹹水溜ノ一部カ直ニ釜屋内ニ開口シ鹹水貯藏場ト釜屋トカ單一ノ壁ニヨリテ其上面ノミ隔離セラル、者アリ此釜屋内ニ於ケル鹹水貯藏壺ノ一部ヲ内穴ト稱ス内穴ニハ之ニ相當スル籠ヲ嵌入シ籠ノ外面ニハ「ズツク」製袋ヲ以テ之ヲ蔽フカ或ハ筵ヲ卷キテ内穴ニ於ケル鹹水ニ粗塵ヲ雜ヘサラシム之ヨリ汲杓若クハ釣瓶ヲ以テ濾過槽ニ汲入ル、モノトス

二 釜及竈ノ種類、構造

赤穂ニ於テ使用スル釜ハ左ノ種類トス

一、結晶釜

石釜
鐵釜
鍊鐵釜

二、温メ釜

石釜ノ構造ニ關シテハ次項ニ讓リ鐵釜ニ付キ之ヲ記述スヘシ竈

ノ構造ハ石釜ト鐵釜トニ論ナク何レモ同一竈ヲ使用スルヲ以テ之レ亦便宜上石釜築造ノ説明ニ讓ル
鑄鐵釜ハ幅六尺二寸、長サ八尺二寸ニシテ深サ二寸二分、縁幅一寸五分ヲ有シ底ノ厚サ七分トス其構造形狀圖面ノ如シ

鍊鐵釜ハ幅八尺一寸、長サ一丈二尺二寸、深サ三寸二分、底ノ厚サ三分ニシテ三枚ノ鍊鐵ヲ接合シテ之ヲ作り長サ三尺五寸徑八分ノ鐵棒八本ニヨリテ木架ニ掛ケテ之ヲ支持シ且ツ釜面ノ高低ヲ斟酌スルニ供ス(別圖參照)

温メ釜ハ口徑二尺九寸、深一尺八寸五分、厚サ二分ノ鑄鐵製ニシテ其形狀別圖ノ如ク普通一釜ニ付キ二個ヲ備フレトモ一個ヲ有スルモノアリ

三 石釜及竈築造方法並ニ築造使用ニ至ル迄ノ操作

石釜築造ニ要スル材料ヲ大別シテ釜石、塗料ノ二種トス當地方

ニ於ケル石釜ハ何レモ自然石釜ノミニシテ釜石ハ天然ノ岩石ヲ用ヒ敢テ人爲的加工ヲ施スコトナシ其形狀ハ扁本歪形厚サ約一寸ニシテ大小一定セサルモ長徑四五寸ニ亘ルモノヲ普通トシ印南郡市川ノ上流及ヒ加古川ノ上流ヨリ採取スルモノヲ用ユ多ク賞用セラル、ハ加古川産ニシテ一個壹錢乃至壹錢五厘而シテ其之ヲ使用スルニハ燃燒ニヨリ龜裂ノ虞ヲ避クルカ爲メ豫メ之ヲ燒ク一釜約六百個ヲ要ス

塗料ハ普通松葉灰(松葉乃至齒朶葉ノ灰)一石二斗ニ鹽(黑鹽又ハ釜立鹽等ノ粗惡鹽ヲ用ユ)一斗五升鹹水約三斗ヲ混和シ槌ニテ捏合ス之ヲ「塗灰」ト稱ス釜ノ構造ヲ説明スルニハ先ツ竈ノ築造ヲ説明スルヲ便トス

竈ノ築造、

竈築造ノ季節ハ固ヨリ一定シタルモノニアラスト雖モ冬季鹽田作業ヲ停止シ前年ノ採收ニ係リテ貯藏セラ

レタル鹹水ノ煎熬シ盡キタルトキ即チ普通二月下旬ニ至リ前年度マテ使用セラレタル竈壁ヲ毀テ之ヲ改築ス而シテ其竈壁ヲ造ルト稱ス右作業終リタル後舊竈跡ニ鹽田溝渠内ノ泥土ヲ充填シ能ク之ヲ搗固シ適宜ノ程度ニ乾キタルトキ竈底及其上部周壁ニ適當ノ高サヲ有スル壁ヲ作出ス

竈底ノ構造ハ圖ニ示ス如ク後ニさなト稱スル部分ヲ築クヘキ平底ヲ作り四圍ハ之ニ向ツテ傾斜セル底ヲ作ラシム其周邊ニ(イ)ニテ示ス如キ平坦ナル部分ヲ設ケ其外側ニ窺壁ヲ作ル而シテ周圍ノ壁ハ釜製作後ニテ之ヲ作ル如上ノ構造ヲナス作業ヲ造ルコしらヘト云フ

(ろ)ノ上部ニハ石炭ヲ載セテ焚火スヘキ架堤ヲ作ルモノニシテ此架堤ヲさなト云フ而シテさなノ構造ハ山土ヲ充分打チ固メ側面及ヒ上面ヨリ見タルモノ別圖ノ如シ即チ石炭ハ(は)ニ於テ燃燒ス而シテ(に)ヲさなわしト云ヒ(は)ヲさなノ目ト云ヒ(は)ヲさなノ甲ト云フ

後壁ノ中央部ニ煙ヲ排除スル溝狀ノ排氣口ヲ穿テ又左右ノ兩壁ニハ中央ヨリ等距離ノ場所ニ燃料ノ燃燒狀体ヲ觀察シ且ツ

送氣ヲ加減シ又燃料ヲ攪拌スヘキ器具ヲ挿入スヘキ攪拌口(こて穴)即(と)ヲ兩壁ニ二個宛左右合計四個ヲ穿ツ又前壁ノ中央ニハ燃料ヲ投入シ又送氣ヲ目的トセル焚火口ヲ作ルモノトス

焚火口ノ下部ニハ壁隔ヲ以テさなノ直下ニ通セル長サ六尺深サ三尺二寸先方ニ傾斜セル灰滓掻出口(ち)ヲ作り火架下ニ於ケル各送氣口ニ通セシム而シテ此灰滓掻出口ハ亦兼テ送氣口ノ用ヲナスモノトスさなヲ作成スルニ作業ヲさなかけト云フさなト釜底トノ距離ハ普通一尺二三寸トス

さなト釜底トノ距離ハ普通一尺二三寸トス

さなト釜底トノ距離ハ普通一尺二三寸トス

ハ灰滓掻出口ノ直上ニ位置シ底部ハ石材ヲ用ヒ周圍ハ鐵製又ハ石材トシ其上邊ハ何レモ石材ヲ以テス而シテ其中間ヨリ少シク下方ニめやすかね或ハすらしがねト稱シ鐵製ノ幅二寸位ノモノヲ横ニ嵌入ス是レ燃燒ニ要スル器具ヲ乗セシラシ作業ニ便ナラシムルカ爲メナリ亦前壁焚口ノ左側或ハ右側ノ外方ニ煎熬夫ノ食物ヲ煮沸スルニ要スル小竈ヲ築設ス

スル小竈ヲ築設ス

攪拌口(てこ穴)

ハ左右兩壁ニ各二個ヲ有シ稍長方形ノ窓形ヲナセルモノニシテ其周邊ニハ鐵製ノ枠ヲ入ル之ニ蓋ヲ附ス蓋ハ瓦ヲ以テスルモノト土製ノモノトアリ何レモ嵌入取除キニ便スル爲メ中間ニ小孔ヲ穿テリ

排氣口ハ焚口ト相對シ後壁ノ中央ニ穿テルモノニシテ長方梯形ヲナス上邊三寸下邊四寸ニシテ之ヨリ排出スル熱氣ハ煙道上ニアル温メ釜ノ底部ヲ嘗メテ煙突ニ出ツ

煙突 釜屋ノ外部ニ石垣ヲ以テ臺ヲ作ル其太サ方四五尺其上方ニ高サ一丈乃至一丈五尺ノ高サヲ有スル土管ヲ以テ作レ

ル煙突ヲ有ス口徑下端ハ一尺五六寸上端八九寸ニシテ土管ノ周邊ハ土ヲ以テ之ヲ塗り籠或ハ篋ヲ以テ之ヲ掩フ(別圖參照)

石釜ノ築造方法

ねだまくらト稱スル木片ヲ竈壁上ニ載セ其上ヲ越ヘテねだト稱スル約方八寸長サ一丈二尺ノ木材ヲ相對セル壁ヲ踰ヘテ之ニ渡シ此ノ上ニ水準器ヲ載セテ釜ノ水準ヲ定ムルモノトス此ノ如クニシテ釜ノ占ムヘキ位置決定

セハねだ上ニハ釜板ト稱スル厚サ一寸内外幅八寸乃至一尺長サ約七尺六寸ニシテ釜ノ縦ヨリ稍長キモノヲ相並列シ其上ニふきがねト稱スル約六分ノ鐵製角材長サ一丈一尺二寸ナルモノト長サ七尺二寸ナルモノトノ各二本宛ヲ以テ長方形ニ之ヲ組立テ其四隅ヲすみがねト稱スル長サ一尺九寸ノ鐵材ニテ拘束シ釜ノ輪廓ヲ形成スルコト別圖ニ示ス如クス斯ノ如キ操作

ヲしたごしらへト云フ(い)ハねだニシテ(ろ)ハ釜板(は)ハふちがね(に)ハすみがねトス

したごしらへ終レハ釜板上ニ繩ヲ張りテ尺度ヲ計リ後ニつりヲ挿入スヘキ位置ヲ決定ス此位置ニハ竹釘ヲ釘着シ長邊ニ九本短邊ニ四本合計三十六本ノつりヲ設クヘキ位置ヲ豫メ明示シ之ヲ終レハ繩ヲ去ル而シテ此竹釘ハ可成釜面上ニ出テサル如ク注意スルヲ要ス之レ爾後ノ製造作業ニ妨ケアルヲ以テナリ

したごしらへ終了シつりノ位置決定シ終レハ釜板上ニしえさト稱シ藁ヲ一二寸位ニ切りタルモノヲ撒布ス之レ釜石ヲ緊合セシムル塗料ノ釜板ニ粘着スルヲ避ケ且ツ釜表面ヲ平坦ナラシムル爲メ自然石ノ厚薄アルモノヲ並列シテ之ヲ斟酌加減スルニ便ナラシムルモノトス

しえさノ撒布終レハ此ノ上ニ釜石ヲ並列ス其法厚キモノヲ中央トシ薄キモノヲ周圍ニ用ユ且ツ石ト石トハ可成相互ニ接着セシムルニアラサレハ釜ノ耐久上ニ干係アルカ故ニ石たゞきト稱スル器具ヲ以テ石ヲ敲キ寄セ各釜石ノ邊縁ヲ可成相互ニ相接着セシメ且ツ釜表面ヲ平坦ナラシム然ルニ固ト自然石ナルヲ以テ多少石ト石トノ間ニ空隙ヲ生スルヲ免レズ此空隙ニハ他ノ石ヲ割リテ小片トナシタルモノヲ挿入シ緊合資料タルぬり灰ヲ塗ルモノトス以上ノ作業ヲ灰ぬりト云フ

灰ぬり作業終レハ釜面ヲ平滑ナラシムルカ爲メかすすりナル作業ヲ行フ即チ鹹水ヲ釜面ニ注キ鹽すりヲ以テ釜面ヲ摩擦スルニアリ之ニ要スル鹹水約三斗後釜面ノ汚物ヲ除去スル爲メ鹹水ヲ以テ釜面ヲ二三回洗滌スルモノトス

洗滌終レハ竹釘ヲ抜き取り釣り金ノ屈曲セル部分ニ就キ石ト石トノ間ニ挿入シ可成塗灰ノ層ヲ傷ケ空隙ヲ大ナラシメサル如クシ石釜築造圖ノ甲ノ如クつりヲ以テ石ノ下端ヲ懸クルコト全圖乙ノ如クス而シテ此際生セル損所空隙ハ塗灰ヲ以テ修理充填ス

釜ニハ高サ二寸五六分内外ノ縁ヲ作ラサルヘカラス之カ爲メニハ豫メ凝石ヲ適當ノ大サニナシタルモノヲ取り之ヲ立テ列ヘ塗料ニ少許ノ石灰ヲ混シタルモノヲ用ヒ釜ノ周邊ニ釜ふちヲ作ル

以上釜石ヲ釜板上ニ並列シ縁ヲ作ルマテノ作業ヲ包括シテ釜を塗るト唱フ

如上述フル手續ニヨリ釜ノ大体ニ於ケル構成ハ既ニ了リタルモ尙ホ其之ヲ乾燥セシムルノ要アリ之カ爲メニハ釜面ニ於テ大松薪ヲ燃燒ス夫カ爲メ松割木ヲ鱗狀ニ疊積ス蓋シ其理由トスル所ハ可成松割木ノ釜面ニ接觸シテ釜面ヲ傷クルコト甚ナキヲ期スルト共ニ燃料ノ接觸スル部分カ他ニ比シ過乾シテ爲メニ釜面ニ龜裂ヲ生スルヲ避クルカ爲メニ燃料ノ疊積終レハ之ニ點火ス點火スル位置ハ釜ノ四隅ヨリスルヲ普通トス之レ熱ノ普ク達センコトヲ期スルカ爲メナリ而シテ此使用スル松薪

ハ木質柔クシテ一時ニ火焰ノ移ルカ如キモノヲ佳トス

燃料ニ火ノ移リタルトキハ水ニテ濕潤セル莖數枚ヲ以テ薪ノ上ヲ被覆ス若シ火焰被覆ノ莖ヨリ突出スルトキハ熱ヲ平等ニ釜面ニ分與スルコト能ハス爲メニ本作業ノ効果ヲ減殺スルモノトス故ニ鹹水ヲ以テ浸潤スル莖ヲ用ユル場合ニアリテモ莖カ燃燒セラル、恐アルトキハ鹹水ヲ莖上ヨリ撒布スルノ要アルコト勿論ナリトス而シテ此作業ハ約一時間内外ヲ要ス一釜ニ要スル松薪ハ五百目一把(一把五本括リトス)トセルモノ五十四把即チ二十七貫目ヲ要ス

釜ノ焙ラレタル適度ハ絶對的ニ之ヲ檢定スルコトヲ得サルヲ以テ普通鹹水ヲ以テ充分ニ浸潤シタル莖ノ燃燒スルニ至レルヲ以テ程度トス

上記ノ燃燒終レハ釜面ニ殘留スル燠ヲ釜ノ周邊ニ搔キ集メテ自然消滅スルニ任ス之ヲ「釜焙リ」ト云フ而シテ釜焙リ後約十ニ時間ハ之ヲ其儘放置ス

「釜焙リ」終リタル後ハ釜内ヲ掃除シ釜面上ニ薄キ木板ヲ敷キ此ノ上ニ登リテつりヲどんがねト稱スルモノヲ通シタル鐵線ニヨリテ支桁即チつり木上ニ繫リ之ヲ捻着ス釜ハどんがねノ上下ニヨリテ昇降セシムルコトヲ得ルモノニシテ則チ之ヲ上クルトキハ釜モ亦昂上セラル、モノトス(石釜築造圖丙參照)

如上ノ作業終リタル後釜板ヲ去リ釜トノ間隙ヲ内面ハ石塊ニヨリテ外面ハ泥土ヲ以テ塗り詰メ以テ其周邊ヲ作ルモノトス

尙ホ竈ノ後方煙道上ニ準備加熱裝置トシテ温メ釜一個乃至二個ヲ連築ス之カ築造ハ圓形ニ地盤ヲ穿チ泥土ヲ以テ周壁ノ高サ一尺二寸トシ側面ノ一端ニ四寸角ノ方穴ヲ穿チ温メ釜ノ外面ニ附着スル煤煙ノ除却ヲナスニ供ス

以上ハ石釜及ヒ竈ノ築造方法ナレトモ尙ホ之ニ附帶セル次ノ裝置ヲ要ス之ヲ櫓ト云フ即チ竈ノ前後壁ノ外方ニ各二本ノ支柱ヲ樹テ其相對セルモノヲ越ヘテ木桁ヲ横フ之ヲ「大渡リ」ト云フ此兩木桁ヲ越ヘテ直角ニ更ニ九本ノ木桁ヲ架ス之ヲ「小渡リ」ト云フ各カすがハ又ハ釘鐵或ハ繩ヲ以テ結束シ動かサル様之カ設備ヲナス而シテ火架ノ兩側ニハ豫メ松葉一貫匁薪材五貫匁ヲ置キ之ヲ石炭ニテ掩ヒ以上ノ設備了リタル後之ニ點火シ漸次燃燒シテ石炭ノ燃燒スルニ至レハ更ニ石炭ヲ投シ

釜面上ニ硫黃ヲ附シタル附木ヲ附ケ之ニ點火スルニ至レハ茲ニ初メテ鹹水ヲ釜中ニ入レ煎熱ヲ初ムルモノトス
此操作終ルマテニハ豫メ温メ釜ヲ架シ鹹水ヲ汲ミ入レ温メ釜ニヨリテ熱セラレタル鹹水ヲ釜中ニ注入スルコト固ヨリナリ

トス若シ最初釜中ニ鹹水ヲ入ル、トキ鹹水ノ漏洩ヲ來タスカ如キコトアラハ石灰ヲ其部分ニ振り鎌ニテ掻キ之ヲ填メ以テ修理ヲ施ス

四 鹹水ヲ釜屋ニ輸送スル装置

鹹水貯藏壺即チ鹹水溜ト釜屋トハ通常六七尺ノ距離ニ設備セラル、カ或ハ鹹水壺ノ

一部カ全ク釜屋内ニ於テ開口スル様ニ設ケラル、モノトノ二アリ後者ニ於テハ鹹水溜ヨリ別ニ鹹水ヲ輸送スル装置ヲ要セサルモ前者ニアリテハはねつるベテ以テ鹹水ヲ汲ミ上ケ釜屋内ノ濾シ穴ニ通スル溝(粘土ヲ以テ塗作セルモノ)ニ注キ込ムニ過キサルナリ或ハ鹹水壺ト釜屋内ノ内穴トノ間ニ二三條ノ節ヲ抜ケル竹ヲ貫通シテ内穴ト鹹水壺トニ突出セル竹ノ兩端ニ布ヲ蔽ヒ之ニヨリテ濾過セラレツ、内穴ニ鹹水ヲ充タスモノトス斯ク釜屋ニ接近セル鹹水貯藏壺ハ一個若クハ二個アリ之レ等ハ別ニ輸送装置ヲ必要トセス從テ特記スヘキモノナシト雖モ右ノ外豫備鹹水溜ヲ有スルモノアリ此豫備鹹水溜ハ採鹹ヲナスニ當リ鹹水溜ノ外側ニ造レルツツかほしニ荷ヒ桶ヲ以テ汲ミ取レル鹹水ヲ注キ汲ミ鹹水壺ニ流レ込マシメ之ニ充滿セハツツかえしノ他ノ一端ヨリ通スル溝ヲ通シテ豫備鹹水壺ニ送ルモノトス降雨連續シテ釜屋ニ接スル壺ニ存スル鹹水焚キ盡サル、ニ至ラハ始メテ釜屋ニ離隔セル豫備鹹水溜ヨリ貯藏鹹水ヲ釜屋ニ輸送スルノ必要ヲ生ス然レトモ輸送装置トシテ特記スヘキモノナリ唯通常一條ノ樋ヲ通スルノミ樋ハ半ハ地面ニ埋没セル陶製又ハ木製ニシテ一端ハ鹹水壺内ノ一隅ニ備フルツツかほしニ通シ此ツツかほしニ注カレタル鹹水ハ右ノ樋ヲ通シテ釜屋内若クハ釜屋ニ近接セル鹹水溜ニ移送セラル、モノトス

五 煎熬用器具ノ名稱、種類、員數、形狀、大小、構造及ヒ其方法

苦汁鍋

鑄鐵製、口徑二尺深一尺二寸五分ヲ有シ釜ノ側方ニ埋メ其上ニ竹或ハ木ヲ縱横ニ各二本ヲ渡シ上ニ鹽取籠ヲ置キ釜ヨリ取出シタル鹽ノ筧ヨリ滴下スル苦汁ヲ受クルノ用ニ供フ而シテ該鍋ハ通常一個トス其形狀温メ釜ニ同シ

炭くべ

櫻板製、長一尺八寸幅五寸二分、一方ヲ開放シタル箱狀ニシテ五寸四分ノ木柄ヲ附ス石炭ヲ竈内ニ投スルニ用ユ

つきわり

鐵製長四尺三寸或ハ五尺六寸之ニ二尺一寸ノ木柄ヲ附シ鐵部ノ先端長六寸幅三寸二分ノ扁平鑿狀ヲナセル

モノニシテ竈内ノ石炭全面ヲ掻キ擴ケテ燃燒セシメ火力ヲ普及平均ナラシムルニ用ユ

をきつき

鐵製長四尺八寸或五尺六寸之レニ一尺九寸ノ木柄ヲ付シ鐵部ノ先端二股二分レタルモノニシテ燃燒セル炭

骸ヲさな下ニツキ落シ火力ヲ熾盛ナラシムルニ用ユ此器ハ一釜屋二本ヲ要ス

くまで

鐵部一尺三寸之ニ竹ノ柄九尺ノモノヲ附シ鐵部ノ先端三ツ股爪形ニ作りさな下ノ炭骸ヲ搔キ出スニ用フ

炭搔き

鐵部ノ長二尺二寸五分ニシテ其先端屈曲シテ鈎狀ヲナシ之ニ一尺六寸ノ木柄ヲ附ス釜並ニ温メ釜ノ煤煙ヲ搔

キ落スニ用フ

すき

木柄四尺五寸之ニ長三寸三分乃至五寸、幅二寸七分ノ鐵片ヲ附シ釜ノ周圍ヲ掃除スルニ用ユ

をきひき

鐵製長サ四尺五寸乃至五尺一寸ニシテ其先端屈曲シテ鈎狀ヲナス之ニ二尺六寸ノ木柄ヲ附シ竈ノ口ニ石炭

ノ燃燒セルモノヲヒキ出スニ用フ

釜柄振

長九寸乃至一尺二寸五分、幅四寸乃至四寸五分最小ノモノハ二寸五分乃至三寸ノ木板ニ六七尺ノ長サヲ有ス

ル竹柄ヲ付シタルモノニシテ煎熬シテ得タル鹽ヲ搔キ寄セ鹽取かへト共ニ鹽取籠ニ掬ヒ取ルニ用フ本具ハ四本ヲ要ス

鹽はねがひ

木製ニシテ幅上部七寸五分下部一尺長一尺六寸之ニ四尺四寸ノ木柄ヲ附シ釜ヨリ採取シ鹽取籠ニ移サレ

タル鹽ヲ居出場ニ刎ネ移スニ用フ

釜入柄杓

ハ徑八寸高サ七寸五分ノ木桶ニ五尺八寸ノ木柄ヲ附シタルモノニシテ温メ釜ヨリ鹹水ヲ釜中ニ移スニ用フ

にがり柄杓

ハ徑六寸五分高六寸ノ木桶ニ四尺六寸ノ木柄ヲ付シタルモノニシテ差鹽ヲ製スルトキ苦汁壺ヨリ苦汁ヲ

釜中ニ注加スルニ用フ

ふたどり

錐狀ヲナセルモノニシテ鐵部長五六寸徑四五分之ニ木柄ヲ付ス攪拌口ノ蓋ニアル小孔ニ本器ヲ挿入シ之ヲ

取り去り又之ヲ閉ツルニ用フ

鹽取かへ

木板幅一尺一寸長一尺三寸之ニ二尺ノ柄ヲ附シタルモノニシテ煎熬シ得タル鹽ヲ柄振ニテ搔キ寄セゑぶり

ト共ニ鹽取籠ニ掬ヒ取ルニ用フ鹽取籠上徑三寸五分、深一尺三寸三分竹ヲ以テ編製セル竹籠ニシテ三箇ヲ要ス採鹽ノ際

鹽取かへニテ此籠ニ鹽ヲ移スモノニシテ差鹽ヲ製スル時ノミニ用フ

引込ミ

幅一尺乃至一尺四寸長八寸之ニ六尺三寸ノ柄ヲ附シ鹽ヲ引キ込ミ鹽取はこニ抄取スルニ用フ

鹽取はこ

幅一尺六寸高五寸ノ箱狀ヲナセルモノニシテ一邊開放セラル採鹽ノ時鹽取かへニテ鹽ヲ引キ入ル、ニ用フ

ふちきり

鎌鐵部ノ長サ五寸之ニ木柄三尺五寸ノモノヲ附ス煎熬ノ際釜ノ内側ニ付キタル鹽ヲ搔キ取ルニ用フ

石叩キ

長五六寸幅一寸内外ノ鐵ニ長二尺許リノ柄ヲ付シタルモノニシテ二個ヲ要シ竈ヲ築造スル際石ヲ叩キ其並列

面ヲ平カナラシメ且ツ煎熬中ニアリテ其高低ヲ生シタルトキ其面ヲ叩キ平カナラシム

鹽すり 長六尺徑八九分ノ竹ヲ割リ之ニ藁一尺二三寸ニ切りタレモノヲ挾ミ下方ニ曲ケ繩ニテ結束ス本器ハ釜焚キ初

メノ際釜ノ内面ヲ摩リ釜面ヲ清潔ナラシムルニ用フ二個ヲ要ス

どろみ桶 高一尺徑一尺一寸五分ノ木桶ニシテ之ニ八寸三分ノ手ヲ付ス之ニ柔キ泥土ヲ充タシ釜ノ周圍ヲすりニテ摩

シ汚物ヲ取除クニ用フすりノ構造ハ鹽すりト同様ニシテ之ヲ泥すリト云フ

こうらをとし 幅八分長四寸ノ鐵ニ六尺七寸ノ竹柄ヲ附シ釜内ニ凝石ノ附着シテ隆起シタルモノヲ取除クニ用ユ

釣瓶 徑一寸高九寸之ニ六尺ノ竹ヲ付シ鹹水ヲ内穴ニ入ル、ニ用フ

どんぐわ ハ鐵部一尺五寸木柄二尺五寸ニシテ居出場ニ凝着セル鹽ヲ搔キ起スニ用フ

かす出シ木鐵 幅約一尺八寸之ニ六尺ノ木柄ヲ附シ熊手ニテ搔キ出シタル灰滓ヲ窰外ニ出スニ用フ

鹽かじき鐵 幅下部一尺上部二寸五分長二尺一寸之ニ四尺五寸ノ木柄ヲ付シどんぐわニテ搔キ起シタル鹽ヲ採取スルニ用フ

ぶしよう鐵 幅上部六寸下部八寸長一尺六寸之ニ九尺ノ木柄ヲ付シさな下ノ灰滓ヲ出スニ用フ

六 釜其他煎熬用器具ノ新調費及保存期限

名	稱	新調費	期限	摘要
鑄鐵釜	釜	七五,000 <small>円乃至</small>	10年	一釜六百餘個ヲ要シ其十分ノ四ハ古キモノヲ用フ
鍊鐵釜	釜	一八〇,000	10年	
溫釜	釜	三八〇〇	3,000	
大釜	石	〇,103		
小釜	渡	七五〇	5,000	
根太	渡	二五〇	3,000	
根枕	太	一,100	10,000	
釜板	太	〇,300	10,000	
	一組	五,000	5,000	
釣金	柱	〇,36		一釜ニ付三個ツ、新ニ増加ス
釜緣	金	二,340	3,000	
隅	金	3,000	3,000	
塗込	金	1,000	1,000	
すらし	金	3,500	10,000	
ごんがれ及針金		〇,70	2,000	
手島	石	1,800	5,000	焚口用
擦り	金	2,400	5,000	焚口ニ用フルモ
さな板		2,500	1,000	
苦汁鍋		6,000	2,000	
炭くべ		2,500	3,000	
つきわり		2,000	3,000	
をきつき		1,500	3,000	
熊手		700	5,000	
炭かき		3,500	2,000	
すき		2,500	2,000	
をきひき		1,350	2,000	

釜柄振	〇、四〇〇	〇、〇一五 <small>日</small>	石釜ニアリテハ	かす出シ木鐵	五、五〇〇	二、〇〇〇	釣瓶	五、〇〇〇	一、〇〇〇
鹽ほねがへ	二、〇〇〇	一、一〇〇	約十五日鐵釜ニ	鹽取はこ	七、〇〇〇	一、六〇〇	引込ミ	四、〇〇〇	一、〇〇〇
釜入柄杓	三、〇〇〇	六、〇〇〇	アリテハ約一ケ	ふちきり鎌	一、八〇〇	一、〇〇〇	どんぐわ	四、〇〇〇	五、〇〇〇
苦汁柄杓	二、五〇〇	六、〇〇〇		石たゝき	三、〇〇〇	五、〇〇〇	鹽かじき鍬	八、〇〇〇	二、〇〇〇
ふたどり	〇、三〇〇	一、一〇〇		鹽すり	〇、一〇〇	一、〇〇〇	ふしよう鍬	五、〇〇〇	六、〇〇〇
鹽取かへ	二、〇〇〇	〇、一〇〇		どろみ桶	二、〇〇〇	三、〇〇〇			
鹽取籠	一、一〇〇	〇、一〇〇		こうら落し	二、〇〇〇	三、〇〇〇			

七

燃料ノ種類、名稱、産地、價格、品質
 ト粘性ナルモノトノ二種ヲ混用ス今之ヲ表示スレハ左ノ如シ
 現今燃料トシテ使用セラル、モノハ石炭ノ一種ノミニシテ其質爽性ナル

名稱	産地	價	品質	名稱	産地	價	品質
瓢丹桐三枚物	長崎縣松浦郡鹿野村	一萬斤ニ付 二、三圓乃至二、九圓	粘性ニシテ燃焼スルハ粘結ス	小倉	炭豐前國小倉	一萬斤ニ付 十六圓二十錢全	上
大加勢三枚物全		七、二七圓八十錢全		業	炭山口縣厚狹郡高千帆村	二十六圓全	上
日ノ出産全		上二十四圓三十錢全		中越改良炭全	元山村	十八圓九十錢全	上
唐津芳谷肥	前唐津	上二十六圓全		上最大弧全	高千帆村	二十二圓六十錢全	上
虫喰本平田	長崎縣北松浦郡小佐々村	上二十八圓全		上西大坪山中堀全	上	二十二圓六十錢全	上
仁田谷全		上二十六圓全		上竹ノ下全	上	二十六圓全	上
見初全		上三十一圓六十錢全		上改良赤七鹿全	上	十八圓九十錢全	上
三徳炭山口縣厚狹郡十五圓乃至二十二圓		上三十一圓六十錢全	爽性ニシテ燃焼スルハ粘結モス	上改山新口全	上	二十六圓全	上
最上五段山口縣厚狹郡宇都村		二十七圓全					

備考 價格ハ明治三十九年四月調査ノモノ

八 一釜ニ使用スル鹹水容量并ニ製鹽燃料ノ數量

三等鹽(眞鹽)	鹹水ノ容量	一石四斗	比	重	十八度(母氏)	温	十四度(攝氏)
	收鹽量	六十斤		石炭	百斤		
五等鹽(差鹽)	全	上	一石二斗五升	全	上	十八度(母氏)	同
	全	上	九十斤	全	上	百二十斤	十四度(攝氏)

備考 季節ニヨリ鹹水ノ濃度ヲ異ニスルハ固ヨリナリトス而シテ赤穂濱ニ於テ周年ヲ通シテ煎熬スヘキモノハ母氏十五度乃至二十度ノモノヲ用ユ

從テ石炭ノ數量モ亦同一ナラス石釜ニアリテハ量少百斤ヨリ最多百八十斤鐵釜ニアリテハ八十斤乃至百五十斤トス眞鹽ハ鐵釜ニヨリテ煎熬セラレ差鹽ハ石釜ニヨリ煎熬セラル而鐵釜ハ石釜ニ比シテ石炭約十分ノ七八分ニシテ足ル

九 煎熬ニ使用スル各種石炭混合ノ割合 石炭混合割合ハ釜ノ種類ニヨリ亦其配合割合同一ナラス依テ左ニ區別シテ

記サントス

釜ノ種類	石炭配合割合		摘	要
	爽性	粘性		
石	三	四	爽性トハ炭質疎ニシテ燃焼スルトキハ盛ニ火焔ヲ發シ膨脹スルコトナク其骸體依然トシテ變化ナ來タサス灰トシテハ容易ニ火架下ニ灰滓ヲ落セシメ得ルモノニシテ粘性トハ之ヲ燃焼スルモ唯灼熱紅鐵シテ火焔ヲ發スルコト尠ナク膨脹凝結シテ竈下ニ於テ全体一塊トナルモノヲ云フ	
鐵	四	五		
鐵釜	五	六		
鍊鐵	七	七		

十 鹹水ヲ釜ニ注加スルニ先テ汚物ヲ去除スルカ爲メ之ヲ濾過スル装置ノ有無構造及方法 現今各釜屋トモ何レモ之

カ装置ヲナサ、ルモノナク其装置ノ構造ハ別圖ノ如ク高一尺五寸口徑三尺ノ木槽ヨリナリ槽内ニ砂及ヒ木炭ヲ用ヒテ上下ノ二層ヲ作り上層ヲ砂層トナシ其厚七八寸、下層ヲ木炭トナシ其厚三四寸トス而シテ其層間ニハ筵ヲ以テ彼是ノ混合ヲ防キ其上層砂ノ衣面ヲ平坦ナテシメ且ツ上面ハ筵ヲ以テ之ヲ覆ヒ鹹水注入ノ際砂ヲシテ動搖セサルカ如ク装置ス而シテ槽ノ下部ニハ一箇ヲ孔ヲ穿チ以テ濾過シタル鹹水ヲ流出セシムルニ便ス之ニ用ユル木炭ハ俗ニ稱スル堅炭ニシテ砂ト共ニ使用前淡水ニテ清洗シ後之ヲ用ユ且ツ使用後十日ニ至レハ必ラス之ヲ取出シ更ニ淡水ニテ之ヲ清洗ス以上ハ現今多ク使用セラル、モノニシテ他ニ從來用ヒ來リシ一個ノ濾過槽アリ之ヲ濾シ壺ト云フ而シテ其構造ハ別圖ノ如ク一個ノ木槽ヲ釜屋

内ノ地中ニ埋メ其中央ヲ木板ニテ左右ノ二區劃ニ分テ其下端ハ槽底六七寸ヲ離レテ左右各相通セシム而シテ其鹹水溜ニ接セル一側ノ下底ニハ菴ヲ布キ之ニ厚サ約一尺ノ石礫層ヲ作り其上ヲ菴ニテ掩ヒ更ニ其上ニ砂層厚サ約一尺ヲ作り以テ鹹水濾過ノ用ニ充ツ其砂面ニ菴ヲ布クコト前者ト同様ナリトス而シテ鹹水ヲ其上ニ入ル、トキハ自ラ濾過セラレタル鹹水ハ水準ヲ保タンカ爲メ其中間ノ分割木板下ヲ通シテ反對側ナル空虛ノ槽内ニ入ルノ装置トス前者ニ比スレハ其成績良好ナラス

十一 鹹水煎熬ニ要スル人夫ノ種類、名種、員數、賃銀

中等鹽田反別二町七畝二十七步ニ於ケル調査

種	類	名	稱	賃銀	種	類	名	稱	賃銀	種	類	名	稱	賃銀
晝 釜 焚		流	物	一、六六九	晝 釜 焚		別途	酒手	二、七〇〇	晝 釜 焚		釜	あぶり	一、九〇〇
		賃	銀	三、四七〇			祭	月	二、四〇〇			立	繩	二、五〇〇
		食	ざめ鹽仕舞	一、六四二			給	計	一、一五〇			一	月	一、五〇〇
		食	鹽	八、六九九			計	米	三、四六四			食	鹽	八、六九九
		立	繩	三、〇〇九			夜	釜	八、五九三			肴	代	二、六三四
		持	酒	三、一五〇			流	物	二、二四六			給	代	二、六三四
		肴	代	三、五〇〇			賃	銀	二、五二八			合	計	二、七三九

十二 一晝夜ニ於テ煎熬ヲ終ル釜數及ヒ鹹水量並ニ收鹽量

一晝夜鐵釜ハ十二乃至十四、石釜二十乃至二十四ニシテ

其鹹水及ヒ收鹽釜量ノ比ハ次表ノ如シ(第八參照)

種	別	三等鹽(眞鹽)	五等鹽(差鹽)
一晝夜煎熬ノ釜數	鐵釜	一三三	二二一
	石釜	一八、二〇〇	二七、五〇〇
鹹水量	斤	一、九八〇、〇〇〇	一、九八〇、〇〇〇
	石	七八〇、〇〇〇	七八〇、〇〇〇

十三 鹽田一戸前ヨリ得タル製鹽總量

三十六年 千八百六十六石七斗 三十七年 二千〇九十一石三斗 此平均 千九百七十九石

是レヲ重量ニ換算セハ(一升二百七十匁トシ)五萬三千四百三十三貫匁 此斤數 三十三萬三千九百五十六斤

備考 以上ハ中等鹽田ニ於ケル平均ナリ

十四 居出場ノ構造、大小、廣狹

居出場ハ釜屋内側方ニ於テ長方形ニ約二坪許ノ範圍ニ設ケ地上五六寸ノ高サノ縁ヲ

以テ圍ミ之レト同高ノ板ヲ以テ縱ニ三個若クハ四個ニ分割セラル而シテ焚上ケタル鹽ハ順次此分割内ニ堆積セラレ大抵一區劃ニ十二時間分ヲ收容ス

居出場ノ位置ハ多クハ南側ノ壁ニ接シテ之ヲ設ク苦汁ノ滲脱ハ溫度ノ寒暖ニヨリテ遲速アリ暖氣ナレハ速ニ、寒氣ナレハ之ニ反ス南側ニ於テハ冬期凜冽ナル北風ヲ遮リ日光ヲ受クルヲ以テ同一釜屋内ニ於テモ比較的北側ヨリ温暖ナルヲ以テ南側ノ外方カ鹽田ニ接スルモ右ノ關係上苦汁ヲ流出セシムル溝ヲ此方向ニ設ケ苦汁ヲシテ鹽田ニ滲出セシムルモノ尠シトセス如此ハ鹽田ノ地質ヲ不良ナラシムルコト必然ノ理ナルヲ以テ苦汁流出ノ溝渠ノ如キハ改良ヲ要スルモノトス

居出場底部ノ構造ハ差鹽焚釜屋ニ存スルモノヨリモ眞鹽焚釜屋ニ於ケルモノハ綿密ナル注意ヲ施セリ之レ固ヨリ眞鹽ニアリテハ苦汁ヲ注加セサルノミナラス可及的完全ニ之カ滲脱ヲ欲スレハナリ底部ハ地上外縁ノ大サニ於テ約四尺堀下ケ最底ハ左右兩側ヨリ中央マテ勾酌ヲ附シ流シ狀トナシ粘土ヲ塗リ苦汁流出ニ便ナラシム前後兩側ニ於テ石材若シクハ木材ヲ横ヘ底部ヨリ高サ二尺ノ所ニ各二尺許ノ間隔ヲ以テ縱ニ枕木ヲ並列シ其上ニ丸竹ヲ密接ニ敷キ並ヘ一尺二三寸ノ厚サヲ以テ砂ヲ盛リ上面ヲ平坦ニ均ラシ更ニ細キ割竹ヲ以テ製セル簣ヲ蔽フ或ハ底部ニ二尺許荒キ石塊ヲ積ミ均ラシ其上ニ丸竹ヲ敷キ前ノ如ク砂ヲ盛ルニ止マルモノアリ

居出場底面ノ砂ハ苦汁ノ浸潤ニヨリテ甚シク固結シ漸次苦汁ノ滲脱ヲ不適當ナラシムルヲ以テ時々之ヲ搔キ起シテ之カ修理ヲ施シ或ハ新ナル砂層ト之カ交換ヲナサハルヘカラス殊ニ眞鹽ヲ製造スル處ニ於テハ少クモ一週一回搔キ起シテ行ヒ砂層交換ハ一年二回若シクハ三回之ヲ行フ砂ノ厚サハ前說ノ如ク一尺二三寸ヲ適度トスレトモ厚キニ過クルトキハ下層ニ於テ固結スルニ至ルヲ以テナリ(別圖參照)

十五 煎蒸ニ關スル操作及其方法

温メ釜ニ於テ濃縮セラレタル熱鹹水ヲ結晶釜ニ移シ全部結晶スルニ至レハ之ヲ搔

キ取りテ居、出場ニ放置シ水分ヲ滲出セシメ、苦汁脱下ヲナサシム

温メ釜ハ結晶釜ノ後方煙道上ニ二個排列セラレ(一個ノモノモアリ)冷鹹水ハ濾過槽ヲ經テ最初後方即チ第一温メ釜ニ充サレ更ニ結晶釜ニ接着セル前方即チ第二温メ釜ニ汲換ヘラル而シテ製鹽結晶釜ヨリ採取セラレタル後ニ之ヲ充タスカ爲メ第二温メ釜ノ鹹水ハ結晶釜ニ汲換ヘラル、モノトス即チ温メ釜ハ冷鹹水ヲシテ煎熬釜ヲ加熱セル餘熱ヲ有スル火焰ノ煙筒ニ排除セラル、通路ニアリテ此餘熱ノ爲メニ鹹水ヲシテ濃厚ナラシムルト一ハ石釜ニ於テハ直チニ冷鹹水ヲ注加スルトキハ結晶釜ノ龜裂ヲ生スルコトアルヲ以テ豫メ温メ釜ニ於テ一度熱セテレタルモノヲ搬送シテ其龜裂ヲ遮ルニ供ス而シテ結晶釜ニ於テ煎熬セラル、間ニ屢々柄振ヲ以テ表面ニ浮上スル處ノ泡沫及ヒ塵埃ヲ搔キ取り且全面ヲ搔キ均ラシテ結晶ノ平均ヲ保ツ尙ホ其間ニ於テをきつさヲ以テ時々燃燒中ノ石炭ヲてこ穴ヨリ突キ之ヲ搔キ起シテ灰殻ヲ落シ次キニをきひきヲ以テ火架面上ニ於テ燃燒セル石炭ヲ克ク搔キ均ラシ焚口マテ引出シ更ニ適度ニ石炭ヲ加ヘ搔キ準ラシ以テ火力ノ平準ヲ得セシム温メ釜ノ容量ハ通常一石二三斗ニシテ所謂三荷包荷(荷桶七杯)ヲ容ルヘシ一釜ニ煎熬スル鹹水ノ量ハ此ノ温メ釜ニ一杯トス故ニ一釜ニヨリテ煎熬セラル、鹹水ノ量ハ一石二三斗ナリトス

結晶釜ニ汲ミ換ユルニ當テ温メ釜ニ於ケル熱鹹水ノ温度ハ七十度ヲ下ラス而シテ結晶釜ニ移シテヨリ全部結晶ニ至ルマテ要スル時間ハ約一時間十分乃至二十分ナルヲ以テ晝夜ヲ通シ石釜ニアリテハ二十釜乃至二十四釜鐵釜ニアリテハ十二釜乃至十四釜トス

以上ノ如ク鹹水ノ全部結晶スレハ引込みヲ以テ釜ノ一隅ニ搔キ寄セ竈ノ側方ニ備フル苦汁壺(直徑約二尺深一尺二寸五分)上ニ於ケル鹽取籠ニ掬ヒ入レ次回ノ煎熬ヲ終ルマテ苦汁ノ滴下ヲ待テ後居出ニ放置ス

眞鹽ト差鹽トノ差異ハ煎熬中苦汁ヲ差シ加フルト否ラサルトノ差ニシテ差鹽ヲ焚クニハ竈側方ニ滴下セシメタル苦汁ヲ次回ノ煎熬ニ際シ結晶釜内ニ食鹽ノ結晶ヲ來タス時注加スルニアリ苦汁注加ノ程度ハ或ハ全部差シ七分差シ三分差シ等ノ名アリ注加ノ方法ハ通常苦汁壺ヨリ直ニ結晶釜ニ汲ミ入ル、ニアリト雖モ稀ニハ之ニ熱鹹水ヲ加ヘテ薄メオキ其幾分ヲ差スモノアリ之レ等ハ一ニ煎熬夫ノ手加減ニ出ツ然レトモ專賣制度實施後漸次苦汁注加ノ量ヲ減少スルニ至レリ而シテ苦汁注加後約十五分乃至二十分間ヲ經ハ全部結晶ヲ終ルモノトス

苦汁注加ノ目的ハ苦汁内ニ尙ホ含有スル鹽分ヲ折出セシメ之ヲ得ントスルニ外ナテスト雖モ畢竟之ヲ口實トシテ製了鹽ノ

重量ヲ増加セシムルニアリ其割合ハ全部差シニ於テ約二割ノ増加ヲ見ル然レトモ苦汁注加量多キニ從ヒ鹽質ヲ不良ナラシメ從テ價格ニ影響ヲ來スニヨリ徒ラニ其增量ヲ欲シテ鹽質ヲ損スルカ如キ愚ヲ敢テスルモノ漸次減少セントスルノ傾向アリ

煎熬中石釜ノ局部ニ凹陥ヲ生スルトキハ鈎金ニ連接セル鐵線ノごんがねヲ昇上シテ釜面ヲ上昇セシメ又釜ノ一局部隆起ヲ生スルトキハ木片又ハ板ニテ抑ヘ之カ修理ヲナス

又石釜ニアリテハ釜立ノ當時釜面尙ホ不潔ニシテ諸種ノ塵芥等ヲ存スルヲ以テ最初注入シタル鹹水ヲ煎熬シツ、克ク鹽スリニテ擦過シ可成灰等ノ不潔物ヲ取除クハ勉メ其結晶セルモノハ之ヲ採取シ更ニ鹹水ヲ注加スル等此操作ヲ反覆スルコト再三其得タルモノヲ黑鹽又ハ鼠鹽ト云フ品質不良ニシテ爾後製出鹽ノ汚レサルモノヲ得ルニ至リ始メテ前述ノ煎熬方法操作ニ移ルモノトス

十六 從來使用シタル釜及ヒ竈ノ變遷并ニ使用燃料ノ變遷

現時製鹽ニ使用スル釜ハ石釜鐵釜ノ二種ニシテ鐵釜ハ鑄

鐵釜ト鍊鐵釜トノ二種ヲ有ス而シテ鑄鐵釜ハ殆ント赤穂ニ於テ斯業創始ノ際ヨリ使用セラレタルモノニシテ石釜及ヒ鍊鐵釜ハ近ク四五十年前ヨリノコトニ屬スト云フ

石釜ハ殆ント差鹽焚ニ專用セラレ鐵釜ハ概シテ眞鹽焚ニ使用セラル蓋シ石釜ハ其構造上差鹽焚ニアラサレハ之カ耐久力ヲ保ツコト困難ナルニヨル而カモ石釜ハ差鹽焚ニヨルモ尙ホ二十五日乃至三十日間使用スレハ又改築セサルヘカラサルナリ竈ノ變遷ハ燃料ノ變遷ニ胚胎シ釜ノ變遷ハ鹽ノ種類ノ變遷ニ伴フ而シテ從來眞鹽ニ製出セラル、ト差鹽ノ多ク製出セラル、トハ專ラ需要者ノ嗜好ニヨルニアラスシテ鹽價標準ノ計算カ基礎ノ容量ニ取リシト重量ニ取リシトニ關係シ敢テ鹽質ノ良否ハ著シク問フ處ニアラサリシカ如シ故ニ其賣買カ容量ニヨリテ爲サル、トキハ當業者ハ好テ眞鹽製ニヨリ利益ヲ見タリシモ重量ニヨリテ賣買セラル、トキハ差鹽製ニヨリ利益ヲ占メタリシカ故ニ當業者ハ常ニ此等利益上ノ打算ニヨリテ或時ハ石釜ニヨリテ差鹽焚ヲナシ或時ハ鐵釜ニヨリテ眞鹽焚キヲナシタルニ止マリ鐵釜ニ於ケル眞鹽製ハ石釜ニ於ケル差鹽製ヨリモ進歩ノ事業トシテ利多キヲ認メタルモノニハ非サルナリ

赤穂ニ於テハ元一般鐵釜ニヨリテ眞鹽ノミヲ製シタルモノ、如キモ中途概シテ差鹽焚キヲナスニ至リ特ニ寛政年中徳川幕府、献納スヘキ製鹽トシテ赤穂東西兩濱ニ於テ或ル一二ノ製鹽家ヲシテ眞鹽ヲ製造セシメ他ハ一般ニ眞鹽製ヲ禁止セルコ

トモアリシト云フ如上ノ關係ニヨリ一般世人ノ想像スル如ク石釜カ古昔ノ遺物トシテ永ク存スルモノト認ムルコト能ハサルナリ然レトモ今ヤ專賣制度ノ實施セラレ鹽質ノ如何ハ直ニ其價格ニ影響ヲ來タシタルト近時燃料價格ノ騰貴セルトニヨリ生産費ト鹽質ニ對スル比較上及ヒ人智ノ進歩ハ漸次粗惡鹽ヲ排除シタルトニヨリ從テ鐵釜ヲ採用スルモノ多キノ傾向アリ

而シテ從來松薪、松葉等ヲ燃料トシテ石炭ヲ使用セシモノナカリシモ文政年間初メテ之ヲ試ミシ結果遂ニ今日ノ石炭燃料ヲ供スルニ至レリ其沿革ハ載セテ第二章鹽業ノ沿革中ニ詳ナリ

此ノ如ク今ヨリ八十一年前即チ文政六年以前ニアリテハ專ラ松薪ヲ燃料トセシハ事實ニシテ自ラ竈ノ構造モ亦現今ノモノト相違セリ爾來石炭ヲ用ユルモノ漸ク増加シ松薪ノ價格モ亦騰貴スルニ從ヒ松葉及ヒ朶草ヲ用ヒテ煎熬ヲナスモノアルニ至レリ明治十年鹽田地價調査ノコトアリ當時尙ホ大土手、田邊、黑崎等ノ各濱ニ於テハ松葉ヲ使用セシモノ數軒アリシト云フ爾後尙ホ繼續シテ明治二十六年頃ニ至ルマテ田邊濱ニ於テ行ハレタリシモ漸次其跡ヲ絶チ現今之ヲ使用スルモノナク悉ク石炭燃料ヲ使用スルニ至レリ

而シテ當時使用セシ松薪ハ附近ヨリ購買シ松葉ハ生葉ノマ、中秋ヨリ春季ニ亘リテ之ヲ購買シ和氣郡福浦村、本郡鹽屋村、折方及ヒ大津村地方ハ其生産地タリシト云フ而シテ其松葉ハ老樹ヨリハ寧ロ多ク若樹ノモノヲ用井タリ一把長サ二尺、廻リ一尺五寸位ニシテ重量二貫匁ノモノヲ乾枯シ約一貫二百匁トナルニ至リ燃料ニ供セリ而シテ春季購入ノモノハ夏季ヨリ秋季ニ秋季ノ分ハ冬季ヨリ春季ニ至リテ燃料トス其買入レタル松葉ハ釜屋ノ附近或ハ周圍ニ積累シ風雨ニ曝露シテ自然ノ乾枯ニ任ス

朶草(しだくさ)モ亦松葉ト共ニ燃料トシテ用井ラレ主トシテ火力ノ弱キヲ欲スルトキニ使用セラル和氣郡福浦村ニテハ家業ノ餘暇或ハ專業トシテ鹿久居島ニ於テ之カ艾除ニ從事シ各釜屋ニ於テハ主トシテ同地方ヨリ購入セリ一把ノ重量七八百匁ナリ

松葉ハ其價格二十年前ニ於テハ一把米一合換ニシテ朶草ハ三把米一合換ナリ
今當時ニ於ケル一釜ニ對スル消費量ヲ記サハ

種	類	一釜ニ要スル燃料	一晝夜ノ釜數	合	計
松	薪	一二、〇〇〇 ^貫	一二		一四四、〇〇〇
松	葉	一〇、八〇〇	一三		一四〇、四〇〇
草	草	六〇、〇〇〇	一三		七八〇、〇〇〇

松葉ヲ燃料トシテ得タル副産松葉灰ハ一晝夜一俵半(四斗俵)ヲ得而シテ此松葉灰ハ石釜築造ニハ尤モ適切ノモノニシテ一俵ノ賣買價格ハ當時四十錢ナリシト云フ

鑄鐵釜ハ前記ノ如ク其使用久シキニ涉リシト雖モ鍊鐵釜ハ約二十年已前ヨリ多ク使用セラル、ニ至レリ而シテ竈ハ燃料ト共ニ其築造法ヲ變シタルモノニシテ松薪若クハ松葉ヲ燃料トセシ時代ニアリテハ今日ノ如クさなヲ要セス唯單ニ四隅ヨリ斜下セル竈内ニ燃料ヲ差シ加ヘタルニ止マリ其燃燒用器具ノ如キモ從テ自ラ異ナレリトス松葉ヲ用ヒシ竈ニアリテハ竈ノ後方温メ釜下ノ空隙ニ熱灰ヲ押し落シ更ニ其後方ヨリ之ヲ取去ルカ如ク又煙突ノ裝置ナク煙ハ釜下ノ四隅ヨリ排出セシメタリ

今當時ノ竈構造ヲ略叙シ以テ其變遷ヲ知ルノ一資料ニ供セントス

松葉焚竈ハ其竈底部ノ左右兩側ヨリ中央部迄勾配ヲ有シ中央ニハ前後ニ通スル狹キ且ツ淺キ溝ヲ設ケ殆ント流シ狀ヲナスニ過キス其中央ノ溝ヨリ後方温メ釜下ニ燃燒シテ得タル熱灰ヲ搔キ落シタリ

而シテ今日行ハル、竈ハ其形態ヲ松葉焚竈ニ取り石炭燃燒ニ適セシムルカ爲メ種々ノ經驗ト久シキ歲月トニヨリ自ラ今日ノ如キ構造ヲナスニ至リシモノニシテ其變遷上劃然タル順序ヲ經タルモノニアラス故ニ正確ニ之ヲ記スルノ事項ナシ

十七 煎熬ニ間スル其他ノ事項 差鹽及ヒ眞鹽焚キヲ問ハス冬季採取ニ係ル鹹水ニシテ煎熬ノ際過半結晶スルモ沸騰

困難ナルモノニアリテハ(夾雜鹽類ノ多量ナルヲ云フ)左ノ一ヲ加ヘテ之ヲ助ケシム

- 一、荒布(方言めし)
- 二、拘棘(方言やゝはうづき)
- 三、豆腐湯
- 四、石油

荒布ハ百匁ヲ水一斗五升ニ煎出シタル液ヲ煎熬釜(容量一石二三斗)へ普通二合乃至五合ヲ加ヘ其尤モ多キトキハ一升ヲ加フ荒布ノ如何ナル作用ヲナスヘキヤハ未タ研究中ニ屬スルヲ以テ其化學的變化モ亦明ナラス然レトモ實際上沸騰ヲ催スモ

ノトシテ普通使用セラル

拘棘ハ新芽長サ約一尺ノモノヲ小束トナシ温メ釜ニ入レオクトキハ沸騰ヲ催スモノナリトシテ之レ亦普通使用セラル

豆腐湯ハ普通五合ヲ煎熬釜ヘ加フ使用稀ナリ

石油ハ普通二勺ヲ煎熬釜ニ加フルモノニシテ其製鹽ハ殆ント三十日間石油ノ臭氣ヲ放ツモノナリ從テ前者ト同シク其使用稀ナリ

十八 一ケ年間ノ平均煎熬日數 既往三ケ年間ノモノヲ掲記スレハ如左

三十六年 二百二十日乃至二百三十日 三十七年 二百十五日乃至二百六十五日

三十八年 百五十日乃至百八十日 平均 二百十日

十九 一ケ年間ノ平均收鹽量 今三十八年度赤穂東西兩濱ニ於ケル收鹽量ヲ記サハ

眞鹽 一千二百三十八萬五千七百四十斤 差鹽 二千三百九十六萬一千二百十四斤

計 三千六百三十四萬六千九百五十四斤

二十 一ケ年間ノ採鹹及ヒ煎熬總費用 一町步當調査

等	級	採鹹ニ屬スル費用	煎熬ニ屬スル費用	其他	計
上	田	三三四、七二七	四七六、七八五	五二八、六〇九	一、三四〇、一二一
中	田	一六〇、一二七	四三七、六〇四	四五三、〇八八	一、一五〇、八一九
下	田	二二二、五七七	四一二、五三二	四〇二、七〇八	一、〇三七、八一八

二十一 平年ニ於ケル收支計算表 中等鹽田反別二町七畝二十七步

收 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
製鹽販賣高	二、四七七、七〇〇	採鹹ニ屬スル分	二、四二四、四三三
計	二、四七七、七〇〇	器具器械新調費	四、七八六
		同 修繕費	二、五五
		鹽田修繕費	九、七三二

科 目	金 額	科 目	金 額	科 目	金 額
鹹水溜其他修繕費	二,一〇〇	釜竈修繕費	四,一四〇	公 課	六,三三四
砂 入 替 費	三六,六七四	釜屋建築費	一四,九五〇	包 裝 費	九,一七六
堤防樋管水閘費	四,一四八	煙 突 同	一四,六五〇	資 本 利 子	二〇,一八二
鹹水溜建築費	二,五三二	鹽 納 屋 同	八,七五二	固 定 資 本 所 屬	一〇〇,五三三
流 シ 樋	三,五七一	石 炭 納 屋 同	四,九七七	運 轉 資 本 所 屬	一〇一,五〇〇
柄 振 納 屋 同	四,四四〇	薪 炭 費	六,七二〇〇	雜 費	一四,五〇〇
煎熬ニ屬スル分	一〇四,三二一	勞 銀	四八,七四〇	計	二,三九二,五五三
器具器械新調費	四,五〇九	採 鹹ニ屬スル分	二九,三八二	差 引 利 益	九五,二〇七
土 圍 建 築 費	五,三〇〇	煎熬ニ屬スル分	一三,七三九		
石 釜 新 築 費	二,三二八	雜 役 人 夫	五,〇二九		

二十二 其他煎熬鹹採ノ方法、鹽田釜竈其他ニ關シテ進歩シタル點、改良ヲ要スヘキ點及ヒ改良案

叙ノ外他ノ方法ヲ以テナセルモノナシ 採鹹煎熬トモ前

專賣法施行以來從前ニ比シ其進歩シタル點ヲ列舉スレハ如左

- (一) 採鹹法ノ改良 從來撒砂ノ曝乾ハ唯單ニ一日ニシテ二日以上ニ亘ルモノナカリシカ近時撒砂量ヲ增加シテ濃厚鹹水ヲ得ントスルニ努メタリシ結果其採鹹法ノ操作ニ改良ヲ施スニ至レリ
- (二) 沼井ノ改良 從來沼井ハ悉ク粘土製ナリシニヨリ耐久力ニ關係ヲ及ホスコト少シトセス故ニ其周壁ニ木板ヲ用ヒ亦下穴ニ甕及ヒ桶ヲ用ユルニ至レリ
- (三) 鹹水濾過裝置ノ設備 温メ釜ニ鹹水ヲ注加スルニ先ダチ之ヲ濾過シテ諸種ノ夾雜物ヲ除去ス
- (四) 石灰分ノ除却方法 熬熬釜中ニ於テ沸騰ノ際鹽ノ結晶ニ先チ石灰分ヲ除却スル爲メ一ノ器具ヲ使用ス
- (五) 苦汁注入量ノ減少 苦汁注入量ヲ漸次減少スルニ至レリ
- (六) 煙突ノ增設焚火口及ヒ攪拌口ニ覆蓋ト煙突トヲ設ケ煤煙ノ釜屋内ニ飛散スルヲ防止ス

(七)換氣裝置ノ設備 釜面上ヲ掩フ方錐形ノ屋根ヲ設ケテ釜屋々根上ノゆげ抜キニ達セシメ水蒸氣ヲ屋外ニ導キ其逸

出ヲ迅カナラシム

(八)苦汁中ニ存スル廢廢鹽ノ利用 苦汁壺ニ存スル廢棄鹽ヲ洗滌乾燥シテ之ヲ製ス

(九)居出場ノ改良 面積ヲ擴張スルト共ニ其底部ノ砂層ノ修理ヲ屢々ナラシメ且ツ同處ニ蓋覆ヲ設ク

(一〇)散鹽貯藏方法 從來包裝ノマ、倉庫内ニ貯藏シ來リシカ近時散鹽ノマ、貯藏スルノ方法ヲ取ルニ至ル

(一一)精製鹽ノ製出 鹹水ニ藥品ヲ投シテ精製鹽ノ產出ヲ計ルモノアリ

將來改良ヲ要スヘキ改良案トシテハ大概左ノ如シ

(一)鹽田地盤ノ改良

(イ)作業法ノ改良及ヒ變易 (ロ)沼井ノ改良

(ハ)鹽田地盤ノ改良ニ伴フ撒砂量ノ増加 (ニ)溝渠ノ修築

(ホ)濃厚鹹水ノ採收 (ヘ)鹹砂曝露方法ノ改良

(二)煎熬法ノ改良

(イ)釜竈ノ改良 (ロ)温メ釜ノ改良 (ハ)釜屋ノ改造

第四章 製鹽及ヒ副產物ノ種類、用途

一 眞鹽又ハ差鹽ノ區別及各其數量 三十八年度ニ於ケル製鹽數量ヲ區分スレハ如左

眞鹽	差鹽	合	計
一二、三八五、七四〇 _斤	一二三、九六一、二一四 _斤	三六、三四六、九五四 _斤	

差鹽ハ從來一釜ヨリ煎熬セラレ滴下セル苦汁ハ悉ク之ヲ次回ノ釜ニ注加セシカ近時ハ三分乃至七分ヲ注加シ殘餘ハ之ヲ拋

棄スルニ至レリ

二 鹽ノ理化學的性質 今尙ホ調査中ニ屬ス

三 鹽主要ノ用途 赤穂鹽ハ主トシテ東京ニ販路ヲ有シ主要ノ用途トシテハ食用ニ供セラレ又醬油釀造用、味噌製造

十三 副産物ノ價格 前條ニ同シ

十四 鼠鹽、かいさき鹽、泥鹽、居出鹽、釜立鹽等ノ粗惡鹽産出額其使用方法等

之レ等ハ何レモ鹹水ヲ作ルニ用ヒ現時

賣買スルモノアルヲ聞カス

第五章 鹽ノ包裝及秤量

一 從來ニ於ケル一包裝鹽ノ數量

種類 容量 重量
差鹽 三斗五升 九貫六百匁
真鹽 一斗 二貫四百匁

二 包裝ノ形狀、種類

種類	直徑上	直徑下	高	周	圍	縱	繩	横	繩	備	考
大俵	一尺二寸	一尺八分	一尺一寸	四尺五寸六分	五ヶ所	三ヶ所	大俵ニシテ其容量三斗五升トス(差鹽)				
小俵	九寸九分	八寸二分	八寸	三尺二寸二分	三ヶ所	三ヶ所	小俵ニシテ一斗ヲ容量トス(真鹽)				

包裝ノ形狀 ハ別圖ノ如シ

包裝編方及其原料

(イ) 原料 藁(素藁)

(ロ) 編方 大俵ノ方

一、符ノ材料 芯(藁ノ硬質部)

一、符ノ間 二寸五分

一、編上ノ長 四尺二寸

小俵ノ方

一、符ノ材料 芯(藁ノ硬質部)

一、符ノ間 二寸五分

一、其數 二本合セ

一、端ヨリ符迄 七寸

一、巾 二尺五寸五分

一、其數 一本

一、兩端ヨリ符迄 四寸五分

一、符ノ數 六ヶ所

一、編目 五本打ニテ五十四、五

一、掛目 二百二十目

一、符ノ數 四ヶ所

一、編目 二本打

四 各種包裝ノ價格

一、編上長サ 三尺二寸

一、巾 一尺六寸五分 一、掛目 百十匁

種	類	價	格	備	考
大	俵	一	四	需供ノ關係ニヨリ時ニ騰貴シテ二錢以上ニ至ルコトアリ亦低落シテ一錢二厘トナルコトアリ	
小	俵	七	七	前全機ノ關係ニ依ル時ニ九厘ニ至ルコトアリ又低落シテ六厘位トナルコトアリ	

備考 本表ハ菰一枚ノ價格ヲ掲ケシモノニシテ之ヲ裝フニハ大俵ハ一俵ニ付キ繩代七厘ヲ要シ(但シ縱横トモ)小俵ハ四厘ヲ要ス

五 包裝ハ一重ナルカ又ハ二重ナルカ又ハ其形狀大小販路先ニ異動ノ有無 遠隔ノ地ニ運送スル場合ニ於テ途中ノ減耗ヲ防クノ目的ヨリ二重ニスル向アルモ右ハ東京廻漕ノ場合ニ限り大阪若クハ其附近ニ運搬スルモノハ悉ク一重ナリトス而シテ之レカ裝置ハ包裝ヲ二重ニスルニ止リ形狀等一重包裝ニ異ナルナシ

六 包裝ニ附記スル商標其ノ他記號ノ種類、形狀、大小

(甲) 産地標準

種	類	形		備	考
		縱	横		
烙	印	二寸	二寸八分	差鹽ニ用ユルモノ	
全	印	二寸七分	二寸七分	眞鹽ニ用ユルモノ	

七 秤量器樹ノ種類、形狀、大小及材料

材料	形狀	大		備	考
		直徑(上)	直徑(下)		
檜	圓形	九寸八寸四分	六寸七寸	五升	明治三十八年五月迄眞鹽使用ノモノ
檜	圓形	一尺一寸九寸五分	九寸四分	九升	全若鹽ニ使用ノモノ

材料	形狀	大		備	考
		直徑(上)	直徑(下)		
檜	圓形	九寸三分	九寸四分	一斗	現今使用ノモノ
檜	圓形	七寸二分	七寸二分	五升	全

乙 鹽問屋各自ノ商標

種類	形状		備考
	縦直徑	横直徑	
烙印	二寸四分	三寸五分	鹽問屋自己ノ商標ヲ烙記スルモノニシテ其形状一ナリ

是目下使用ノ商標ヲ掲ケクルモノニシテ尙ホ斯ル商標他ニ二三種アルモ掲載セス

第六章 貯藏方法

一 倉庫ノ構造、大小及壁床ノ構造

(一)倉庫ノ構造 建築用材ハ松木ヲ主トシ葺草ハ藁ヲ用フ往々瓦葺ノモノアルモ其數稀ナリ其奥行六間間口三間十八坪ヲ有スルモノヲ以テ最モ大ナルモノトシ奥行五間間口二間十坪ヲ有スルモノヲ以テ小ナルモノトス而シテ間口二三尺ノ入口ト周壁ニ地上ヨリ四尺上リニ高サ二尺巾二三尺ノ明リ窓ヲ設クルノ外克ク之ヲ密閉シ外氣ノ侵入ヲ防ク

(二)壁床ノ構造 山土ニ切り藁ヲ混和シタルモノヲ用フルコト普通家屋ノ周壁ニ用ウルモノニ異ナラス其周壁ノ外面ハ雨打ヲ防ク爲メひしき竹(竹ヲ碎キ扁平ト爲シタルモノ)ヲ以テ之ヲ掩蔽スルヲ常トス

床ハ土間ヲ其儘用ヒ何等工作ヲ加ヘス最モ注意深キ向ニアリテハ往々其地面ヲ五寸許リ掘リ取り之ニ砂礫又ハ石炭焚殻ヲ布キ以テ苦汁ノ滲透排泄作用ヲ助クルモノナキニアラサルモ其例稀ナリトス

二 貯藏方法及貯藏期間俵ノ損傷ノ程度及狀態

(イ)貯藏方法 焚上後二三日ヲ經製鹽ノ冷却ヲ待チ包裝ノ後之ヲ貯藏シ撒鹽貯藏ノ例アルナシ而シテ各包裝ハ之ヲ堆積シ藁ヲ以テ掩蔽シ外氣ノ侵觸ヲ防ク

(ロ)貯藏期間ニ於ケル俵ノ損傷ノ程度及狀態 本產地ノ常トシテ包裝鹽ヲ永ク藏置スルコトナク需用不向ノ季節ト雖モ二ヶ月以上ニ涉ルコト稀ナリ是ヲ以テ俵ノ損傷ハ只包裝自然ノ色澤ヲ失ヒ其ノ外觀ヲ損スルノミニ止マリ之カ爲メ未ダ曾テ新ニ包裝ヲ改造スルカ如キコトナシ

三 俵裝ノ大小ニ依ル積揚ノ高サ若クハ俵數及積揚ケ方

大俵差鹽三斗五升ノ容量ヲ有スルモノハ之ヲ三俵重ネトシ小俵(真鹽)一斗ノ容量ヲ有スルモノハ之ヲ四俵重ネトス前者ハ其高サ三尺三寸後者ハ二尺八寸トス

四 一ケ年間ニ於ケル眞鹽差鹽ノ各貯藏步減(容量及重量)及各滴出苦汁量

(一)眞鹽差鹽ノ各貯藏步減並ニ苦汁滴出量

區分	貯藏個數	全容量	於一ケ年後ニ於ケル斤數		全容量上	苦汁量	斤數減步合	備考
			容	量				
眞鹽	十五斤	一斗	十三斤九分	八升六分	三合二勺	七分		
差鹽	六十斤	三斗五升	五十三斤六分	三斗一升四分	一升六合強	一割強		

(二)季節ニヨル步減

區分	斤數	步減				欠減斤數	差引量	備考
		春	夏	秋	冬			
眞鹽	十五斤	一分三	五分二	五分二	二分	一斤一分	十三斤九分	
差鹽	六十斤	九分六厘三	一分四厘一	一分七厘三	五分七厘	六斤四分	五十三斤六分	

五 苦汁ノ採收方法及貯藏裝置 貯藏中生スル所ノ苦汁ハ悉ク地盤ニ滲透排泄セシメ採收貯藏スルコトナシ

六 古積鹽ノ製造方法、製造期間ニ於ケル鹽步減ノ割合 此ノ地方ニ製造ナシ

第七章 鹽ノ販賣

一 從來ニ於ケル鹽販賣ノ方法

(一)製鹽者、問屋、仲買、消費者ノ關係 赤穂地方ニ於ケル鹽業者ハ通稱之ヲ濱人ト云フ而シテ其製造スル所ノ食鹽ハ必ス第一次ニ其町村ニ於ケル問屋ヲ經由シテ各地ニ販賣スルノ慣例アリ今濱人ト問屋トノ關係ヲ述フルニ當リ先ツ問屋ノ性質ヲ説明センニ由來赤穂地方ニ於ケル問屋ナルモノハ藩廳ニ年々相當ノ御禮銀(税金)ヲ上納シ其特許ニヨリ鹽ノ仲次ヲナスモノニシテ何レモ其町村ニ於ケル素封家ナリトス故ニ鹽田ハ概ネ其所有ニ屬シ而シテ濱人ナルモノハ問屋ニ隸屬スル小作人ニシテ百餘年ノ久シキ永代小作ノ關係ヲ以テ製鹽ニ從事セシモノナリ故ニ問屋ト小作人トハ恰モ主從ノ如ク家族ノ如ク親密ナル關係ヲ有セシニヨリ小作料ノ如キ金錢ノ貸借ノ如キモ互ニ證書ヲ交換スルノ煩累ナク一ニ問屋ノ記帳ニヨリ精算スルヲ常トセシカ維新以後藩廳ノ保護頓ニ廢止セラレテヨリ保護制度ノ下ニ利益ヲ專占セシ舊夢未タ覺醒セサルニ早ク

モ家産ヲ蕩盡スル者續々輩出シ鹽田ノ所有モ亦轉々變換シテ遂ニ鹽田ノ所有者ト問屋ト全ク分離セル今日ノ情況ニ推移セリ故ニ現今ニ於ケル問屋ト稱スル者ト濱人トノ關係ハ藩制時代ニ於ケルカ如キ温情ヲ以テ之ヲ維持スルニアラス從ツテ貸借ノ如キモ亦必ス形式ニヨル證書ヲ以テ之ヲ證明スルニ至レリ

問屋ト仲買人消費者トノ關係ニ就テハ特ニ記スヘキ事項ナシ

(一) 現品ノ受授 問屋ト買主ニ於テ賣買契約成立スレハ問屋ハ直ニ其價格ヲ濱人ニ通知シ引渡額ヲ申告セシメ而シテ鹽

ノ積入ニ際シテハ問屋ハ買主及濱人桝取人ヲ從ヘ各釜屋ヲ巡回シテ拔検査ヲ爲シ品質容量ヲ監査シテ現品ヲ受授ス

(二) 代金ノ仕拂及時期 現品ノ受授終了スレハ問屋ハ瀨取賃、諸掛及鹽代金ヲ計算シ各濱人ニ拂渡ヲナスヲ慣例トスル

モ舊來ニ於ケル問屋ト濱人トノ關係ハ第一項ニ記載セル如ク鹽業開始前ニ資金ノ供給ハ勿論日用品ノ給付ヲ受ケツ、アルヲ以テ受取ルヘキ鹽代金ハ問屋ノ帳簿ニ記入シテ他月精算ノ資料ニ供セラル、ニ止リ現金ノ受授ヲ爲サス

二 鹽ヲ賣買スル船頭ノ習慣及船頭カ鹽ヲ賣買運搬スル方法、船員ノ給料船頭ト鹽商トノ關係則チ賣買ノ方法

(一) 鹹ヲ賣買スル船頭ノ習慣 特記スヘキ事項ナシ

(二) 船頭カ鹽ヲ賣買、運搬スル方法 船頭カ鹽ヲ賣買、運搬スル方法ニ二アリ一ヲ買積ミト稱シ他ヲ運賃積ト稱ス

買積トハ仲買人ニ於テ引取リタル鹽ヲ船長ヲシテ販賣セシムル方法ニシテ船積ノ際大俵一俵ハ三斗五升ヲ以テ受取リ東京品川着ノ上三斗二升ノ計算ヲ以テ時價ニヨリ賣渡ヲ爲サシム而シテ東京受渡ノ際三斗二升以上アルトキハ其部分ハ船長及船員ノ利得トナルモ之ニ反シ運搬中ニ於ケル欠減多ク三斗二升ニ止マラサルトキハ總テ船員ノ損失ニ歸スヘキ契約ナリ故ニ運搬中ニ於ケル欠減ノ多寡ハ直ニ船長及船員ノ利益ニ大關係ヲ及ホスヲ以テ其ノ鹽ノ取扱方ハ全ク自己ノ所有物ト同一

般最モ深厚ナル注意ヲ拂フヲ以テ運搬中ニ於ケル欠減極メテ寡シ

運賃積トハ問屋ヨリ船主ニ委託シ一定ノ賃錢ヲ拂ヒ廻送セシムルモノニシテ一般貨物ノ運送ト異ルナシ

(三) 船員ノ給料運賃積

區	分	有	功	丸	天	祐	丸	久	德	丸	凌	雲	丸	萬	金	丸
船	長		四九、二〇〇		四六、五五〇		四八、〇〇〇		四七、四五〇		四七、〇六〇		四七、〇六〇		四七、〇六〇	
水	夫		二七、二〇〇		二五、五五〇		二六、〇〇〇		二五、四五〇		二五、〇六〇		二五、〇六〇		二五、〇六〇	

備考 本表ハ明治三十一年ノ赤穂船主會規約ニヨリ調査

買 積 給 料

區分	給料	鹽ノ利得	計	區分	給料	鹽ノ利得	計
船長	二三、四九三	三九、八六五	六三、三五八	水夫	九、一三六	一〇、一一五	一九、二五一
おやし	一〇、四四二	一七、二五五	二七、六九七	炊夫	二、六一〇	五、三五五	七、九六五
賄夫	一〇、四四二		一〇、四四二				

三 從來ニ於ケル鹽ノ販賣地

仕向地名	種類	斤數	仕向地名	種類	斤數
東京	鹽	三四、八〇〇、五七〇 _斤	摩真	鹽	二九〇、〇〇五 _斤
大坂	鹽	一一、六〇〇、一九〇	野全	鹽	五八〇、〇〇九
神奈川	鹽	五、八〇〇、〇九五	其他	鹽	二、〇三〇、〇二九
浦賀	全	二、九〇〇、〇四七			

四 鹽商カ鹽業者ニ資金ヲ融通スルノ有無及其方法、契約並ニ償却ノ方法

該當事項ナシ

五 從來ニ於ケル鹽ノ濱相場

年次	卸金	額	小賣金額	年次	卸金	額	小賣金額
三十五年	一石	一、二三七 _圓	一升	三十七年	一石	一、一二一 _圓	一升
三十六年	一石	一、二三七	一升	平均	一石	一、一九八	一升

六 鹽價ノ定メ方

鹽價ノ定メ方ハ赤穂東西兩濱ニ於テ毎年濱人ヨリ三名乃至五名ノ鹽價評定員ヲ選舉シ鹽ノ相場ヲ

定メシム之ヲ值師ト稱ス(值師カ定ムル建直ニハ賣買者相互ニ於テ異議ヲ唱フルヲ得サルノ慣行ナリ)值師カ價格ヲ定ムルノ順序ハ鹽商カ問屋ニ來リ鹽ノ買入ヲ申込ムトキハ問屋ハ直ニ之ヲ值師ニ通知ス值師ハ買主及問屋並ニ掛取人ト共ニ釜屋

ニ就テ鹽ノ品質ヲ検査シ而シテ相場ヲ定メ双方合意スレハ爰ニ賣買成立スルモノトス
 差鹽ハ三斗五升入一俵ヲ以テ眞鹽ハ一斗入二百俵ヲ百石ト稱シ百石ヲ以テ建直ノ單位トス
 販賣ノ季節 需給ノ關係生産ノ多少ニヨリ年々其趣ヲ異ニスルアルモ通常十月ヨリ十二月迄ハ其賣行最モ盛ナル

七 時期ニシテ四月ヨリ六、七月ニ至ル間ハ最モ不捌ノ時期ナリトス
 八 鹽ノ俵拔検査ノ方法 拔俵ノ方法ハ抽籤ニ依リ可檢俵ヲ定ム抽籤ノ方法ハ船主側ヨリ賄役、水夫各一名問屋一名
 直師一名鹽業者側ヨリ枴取（鹽ノ受渡ニ就テハ升量ニ紛議ヲ惹起スル多キヲ以テ升量ニ熟練ナルモノヲ鹽業組合ニ常ニ雇
 ヒ置ケリ之ヲ枴取ト云フ）一名都合五人立會先ツ賄役ヲシテ可檢俵ヲ抽籤ニヨリ定メシメ當籤俵ヲ拔取り枴取ヲシテ升量
 セシム拔俵ノ俵數ハ二百俵ニ對シニ俵ヲ法トス拔俵ノ結果容量ニ不足ヲ生スルトキハ全數量ニ對シ悉ク之ヲ補填セシムル
 モ過剩ヲ生スルトキ買受人ノ利得トナスノ習慣ナリ

九 鹽ノ受渡ニ際シ重量容量ノ減少ハ如何ニセシカ其步減ヲ察シテ容量増シ等ヲ爲サ、リシヤ若シ爲セシトセハ其數量如何
 尙其地方ニ於テ何斗俵入一俵トハ實量何斗ナルヤ又小賣一升ノ實量如何
 鹽受渡ニ際シ容量減少スルトキハ賣主ヲシテ補填セシムル外豫メ減少歩合ヲ察シテ容量増ヲ爲シタル事蹟ナキモ大俵三斗
 五升小俵一斗ヲ切枴ノ儘包裝スルトキハ拔俵検査ノ際二分内外ハ必ス減少スルヲ以テ多少ノ手加減ヲ加ヘ俵裝ヲ爲セリ小
 賣ノ容量ハ悉ク切枴ナリトス

十 鹹水賣買ノ有無及其方法、價格ノ定メ方 該當事項ナシ
 十一 製鹽ノ原料タル鹹水ニ對スル見越買ノ有無及其方法 該當事項ナシ

第八章 鹽運搬方法及運搬費

一 從來ニ於ケル鹽ノ運搬方法及各種積載數量 赤穂濱ハ三面山ヲ繞ラシ地形極メテ陸運ニ不便ナリシヲ以テ附近村
 落ニ輸送スルモノヲ除クノ外悉ク海運ノ法ヲ採リ東京又ハ大坂地方ハ日本形帆船ヲ以テ那波、飾摩地方ハ小廻船ヲ以テ廻
 漕セリ今從來ニ於ケル帆船及小廻船ノ各種積載量ヲ掲クレハ左ノ如シ

船名	種類	鹽積載數	備	考	船名	種類	鹽積載數	備	考
有効丸	帆船	八、八〇〇	鹽一俵ハ三斗五升入		小廻船(大)	帆船	一、〇〇〇	鹽一俵ハ一斗入	
千秋丸	帆船	六、五五〇			全(小)	帆船	七〇〇		
三力丸	帆船	六、七〇〇							

二 各運搬方法ニ依ル各運搬先迄ノ鹽一定量又ハ一定容量ノ運賃及出荷地ニ於ケル手數料、諸掛費、保險、着荷地ニ於ケル諸掛費用

(一) 海運ニ依ル運搬先迄ノ鹽一定量 航海中ニ於ケル鹽ノ減耗ハ生産ノ時期及航海日數ノ多少ニ依リ一樣ナラサルモ概ネ左ノ如シ

種別	產地	赤穂ヨリ東京迄	欠減量	備考
容量	十日ヨリ十五日迄	十五日ヨリ三十日迄		
差鹽	三五〇 _合	一四 _合	二五 _合	

(二) 一定容量ノ運賃 差鹽大俵(三斗五升入)一俵ニ付九錢

第九章 小作人ト地主トノ關係

地主 鹽田ノ開拓ハ頗ル至難ノ事業ニシテ且ツ巨額ノ投資ヲ要スルヲ以テ正保以降二百餘年間ニ於テ多クノ鹽田所々ニ拓カレタリト雖孰レモ皆當時ニ於ケル素封家ノ手ニ依テ竣成セラレタリ爾來星移リ當時ノ素封家ハ多ク產ヲ傾ケ其ノ有ヲ失フニ至リタリト雖其ノ地ハ尙ホ依然トシテ地方富豪ノ間ニ買收セラレタルヲ以テ現時尙ホ地方鹽田ハ多ク此等三四素封家ノ有タル状態ヲ失ハス而シテ是等ノ地主ハ自ラ資ヲ投シ事業ヲ經營スルノ煩ニシテ且ツ損益ノ不定ナル事業ニ從ハンヨリモ之ヲ他ニ託シテ小作料ヲ收得スルノ安全鞏固ナルニ若カサルヲ思惟シ概シテ之ヲ小作ニ付スルヲ例トス是レ此地ニ於ケル鹽業ノ自作ヨリモ多ク小作人ニ依テ營マル、所以ナリトス

小作人 地主ノ初メテ土地ヲ開拓シ鹽田ヲ有スルヤ製鹽ニ要スル諸般ノ設備ヲ整頓シ一定ノ小作料ヲ課シテ地方ノ住民ニ貸與シ製鹽ニ從ハシム是レ初メテ地ヲ小作スルモノニ於テ見ルノ状態關係ナリトス然レトモ其ノ設備ノ程度ハ當初鹽田所有者ニ依リ各其ノ趣ヲ異ニシタルモノニシテ日常所要ノ小道具迄モ全部之ヲ整頓セルモノト否ラサルモノトアリテ前者ハ俗ニ道具付鹽田ト唱ヘ小作上現今尙ホ諸種ノ關係ニ於テ後者ト趣ヲ異ニスルモノアリ即道具付鹽田ノ小作ハ獨リ小作料ニ於テ後

(三) 出荷地ニ於ケル手數料、諸掛、保險

區分	金額	備考
問屋口錢	六 _圓	
瀨取其他	八	大俵三斗五升入一俵ニ對スル分出荷地赤穂郡阪越村仕向地東京三十一年分調査

(四) 着荷地ニ於ケル諸掛

區分	金額	備考
問屋口錢	三〇 _圓	
瀨取其他	一一二	全上着荷地東京

者ニ比シ等差アルノミナラス小作人入代リノトキハ一々當初ノ備品ヲ數ヘ之ヲ後繼者ニ引渡スノ定メナリトス然レトモ近時各自皆自營ニ急ニシテ亦他ノ利害ヲ重ンセサルモノアルヨリ斯ル定法モ自ラ頼レ現今ニ在リテハ只其ノ員數ノミヲ取揃ヘテ之ヲ引渡シ亦其ノ實用ノ適否如何ヲ顧ミサルカ如キ狀態ニ歸セリ

相互ノ契約 古來小作人ト地主トハ最モ深キ因縁ヲ有シ殆ト主從ノ觀ヲ呈シ小作者ハ一面地主ノ利害ヲ念トシ事業ヲ經營シ來リタルモ世態ノ推移スルニ從ヒ自ラ舊狀ヲ一變シ其等相互ノ關係亦舊ノ如ク敦厚ナル能ハス現今ニ在リテハ小作ヲ爲サントスルモノハ嚴重ナル小作證書ヲ地主ニ供スルニ至レリ左ニ掲クル證書ノ一例ハ以テ現今相互ノ關係ヲ説明シ餘リアリト信ス而シテ小作期間中ニ於ケル鹽田建物ノ修理、地盤ノ補修、公課其ノ他一切費用ノ負擔ハ總テ小作人ノ負擔ニ歸シ地主ハ全ク之ニ關係ヲ有セサルヲ例トス其ノ小作契約期間ハ通常三ケ年ヲ以テ一期トスルモ往々短キハ一ケ年最モ永キハ十ケ年ニ涉ルモノナキニ非ス

鹽田小作證書 (小作證書ノ一例)

- 一、釜屋一棟 桁行何間 梁行何間 一、納屋一棟 全上 一、水壺一棟 全上 一、何々

外ニ 諸器械別紙目錄ノ通

右之鹽田製鹽場諸建造物諸器械共今般左記ノ條項ヲ以テ約定ノ上我等借請小作仕候處確實也然ル上ハ年期中毎年一月二十日限り入附金全額前納可仕候最モ入附金額ノ義ハ受作中毎年一月十日迄ニ増減確定スル事萬一聊ニテモ相滞リ候節ハ證人引受辨償仕毫モ貴殿へ御損難相懸ケ申間敷候

一入附一ケ年金額 何 程

一受作期限 明治三十何年一月一日ヨリ同三十何年十二月三十一日ニ至ル滿何ケ年トス

一請作中營業ニ關スル諸入費ハ勿論地租縣稅町村稅其他諸掛リ費ハ總テ我等ヨリ相納可申候事

一請作中地盤及堤防ノ手入諸營繕ハ勿論天災地變ニ係ル堤防並ニ諸建物及諸器械等ノ破損ハ總テ我等辨償ノ責ヲ負ヒ在來ノ通り直ニ修繕復舊可致候最モ如何様ノ場合ト雖モ補助金ハ毫モ申出間敷候事

一請作中地盤及諸建物粗略ニ相成候節ハ御見分ノ上御指圖ニ應シ手入又ハ修繕可致候事

一請作中ハ鹽田同業組合及鹽業組合又ハ地主會議鹽業人等ニ於テ決議ノ規約及申合等ハ總テ無違反遵守可致候事

一 請作年限中タリトモ貴殿へ無斷一己人相互ノ契約ヲ以テ我等ヨリ直接他へ貸借等ハ致間敷候事

一 請作年期中如何様ノ義出來候トモ小作返戻致間敷候萬一返戻方御頼談申出テ御承諾被下他方へ御貸付相成候節入附金ニ差違相生シ不足スルトキハ我等責任ヲ以テ速ニ辨償可致候事

一 請作年限中タリトモ貴殿ノ御都合ニテ地所他へ御賣却或ハ御手作相成候トキハ御通知次第何時ニテニ無異議小作速ニ返戻可致候事

右之條項確守可致候萬一前記一項ニテモ違約候節ハ引受證人ハ辨償ノ責任ヲ有スルハ勿論鹽田受作期限中ニ不拘中途小作御引上ケ相成候トモ毫モ異議苦情無之御請求次第即時御返納可仕候爲後日引受證人連署請作證書依テ如件

明治三十年年 月 日

小作人 誰

印

引請證人 誰

印

地主 何 某 殿

日用品ノ供給 此地ノ常習トシテ日用品ノ主要部ヲ占ムル燃料ノ如キ其供給ハ概ネ鹽問屋ニ於テシ其代金ハ鹽田ヨリ産出セル鹽ヲ引渡シ鹽代金ト相殺シ翌年二月末日ニ至リ決算スルヲ例トセルノ狀況ナルヲ以テ亦鹽田地主ヨリシテ何等日用品ノ供給ヲ受クルコトナシ

年ノ豊凶 鹽價格ノ高低ニヨリ生スル地主ト小作人トノ關係地主ト最モ重大ナル關係ヲ有スル小作料ノ如キハ其鹽田ニ依リ一定ノ鹽加調ヲ定メ之ニ前年ニ於ケル鹽價ノ總平均ヲ乘シタルモノヲ以テ納入額トシ之ヲ着手ノ初ニ於テ前納セシメ置クヲ以テ年ノ豊凶鹽價ノ高低等ニ依リ地主小作人相互間ノ斯ル事項ニ關シ何等問題ヲ生スルカ如キコトナシト雖甚シキ凶作ニ遭逢シ小作料ノ輕減ヲ要求スルコトアルモ其ノ例蓋シ稀ナリトス

第十章 組合

一 製鹽組合ノ組織、規程及沿革

(イ) 沿革

藩政時代、藩政時代ニ於ケル鹽ノ事務ハ全ク藩ノ統理ニ係リ諸般ノ經營ハ一ニ藩廳ニ依リ管理スル所ニシテ鹽業者自營ノ餘地ハ極メテ稀レナリキ是ヲ以テ鹽業ニ關スル施設ニシテ現今ニ於ケルカ如ク組合ノ處理ニ待ツヘキ事業ノ多クハ概ネ當時ノ

庄屋若クハ年寄等ノ手ニ依リ解決セラレ各村ノ鹽民ハ皆手ヲ拱シテ成ルヲ待チ之ニ盲從スルノ狀態ニ在リタルカ如シ是レ此ノ地方ニ於ケル組合ノ永ク創設ヲ見ルニ至ラス漸ク近代ニ至リ其萌芽ヲ發シ而モ組合ノ體ヲ具ヘテ顯ハル、ニ至リタルハ最モ近事ノコトニ屬スル所以ナリトス

製鹽組合ノ種類及創立時代

現今赤穂ハ二種ノ製鹽組合ヲ有ス(一)一ヶ村又ハ二ヶ村ニ於ケル製鹽家ノ團體(二)更ニ

各村製鹽者ノ凡テヲ包括シ恰モ各村組合ヲ團結シタル組合ナリトス前者ハ之ヲ村組合ト唱ヘ後者ハ之ヲ赤穂製鹽同業組合ト稱シ各創立年代ヲ異ニス而シテ後者ノ成立ハ主ニ前者各村ニ於ケル團體統一ノ目的ニナレルヲ以テ其ノ創設ハ前者ニ比シ遙ニ近代ノコトニ屬シ實ニ明治十六年ニ在リトス而シテ前者組合創立ノ時代ハ文書少シク其ノ事蹟ヲ詳ニスル能ハス組合思想ノ發達 此ノ如ク赤穂組合ハ其ノ創立最モ近年ノコトニ屬シ從テ未タ多クノ年所ヲ經スト雖モ之カ淵源ヲ温ヌ

ルトキハ遠ク正保以降庄屋、年寄等ノ鹽務ヲ掌リシトキニ淵源シ中頃明和、實曆ノ交十州ノ鹽業者同盟ヲ企劃シタルノ一事ハ地方鹽業者ノ思想ニ一大變化ヲ與ヘ組合組織ノ觀念夙ニ此時ニ發達シ降テ明治維新ノ際ニ當リ政事並ニ社會狀態ノ劇變ハ延ヒテ鹽政ニ關スル舊慣古例ヲ打破シ鹽業者亦各自益々民業自營ノ要ヲ覺知スルニ至リ共同一致ノ下ニ進退セントスル思想ハ駈テ組合ノ創立ヲ促シ茲ニ長足ノ發達ヲ爲シ以テ今日ニ至リタルモノナリトス

組合ノ濫觴

明和八年十州鹽業者備前瑜珈山ニ會シ製鹽時季ニ制限ヲ加ヘテ需供ノ關係ヲ調和シ以テ當時ニ於ケル鹽業者累年ノ困難ヲ匡救セントヲ謀レリ此時ニ當リ此地ノ製鹽業者ハ委員ヲ撰ヒテ之ニ列セシメタリ是レ十州組合ノ濫觴トス

而シテ赤穂組合ノ設立ハ恐ラク此ノ時代前後ナリト想像セララル

組合ノ變遷

爾來年々人ヲ十州大會ニ派シ常ニ其ノ會合ニ列セシメ後文化六年瑜珈山ニ於ケル此會合ニ列シタル者石炭

焚ノ利ヲ聞知シ歸リテ之ヲ地方ニ傳ヘタルハ今日尙人口ニ噲矣スル所ナリ降テ明治年代ニ至リ毎年十州大會ノ各地ニ開カル、ヤ常ニ人ヲ派シ之ニ列セシムルヲ從前ニ異ナラス後ニ至リ四ヶ村組合ハ更ニ連合シテ一組合ヲ組織シ十州鹽田組合赤穂支部ト名ケ製鹽ノ改良及販路ノヲ議シ以テ十州大會ト氣脈ヲ通シ鹽務ノ統一諸般ノ施設ヲ策セリ是レ明治十六年ナリトス

赤穂支部ノ變遷

明治二十三年其ノ組織ニ多少ノ變更ヲ加フルト共ニ之ヲ赤穂製鹽同業組合ト改稱セリ三十四年ニ至リ

各村ニ於ケル鹽務ハ殆ト各村ニ於ケル組合ニ於テ解決セラレ同盟組合ノ要ナキノ觀ヲ呈シ其ノ形勢甚タ振ハス同年ニ至リ遂ニ組合ハ事實ニ於テ中廢セラレタリ然トモ後三十八年ニ至リ之カ再興ニ關シ官廳ヨリノ勸誘甚タ急ナリ依テ同年十一月更ニ

之ヲ興シ以テ今日ニ至レリ

(ロ) 組合ノ組織及規程

組織 赤穂製鹽同業組合ハ製鹽地各村ニ於ケル製鹽業者ヲ網羅シ村組合ハ元各村ニ設立シアリタルモ西濱ハ赤穂、鹽屋ノ兩村組合ヲ合シテ西濱同業組合ト名ケタリ其組合員ハ孰レモ製鹽家ノミノ合同ニナレリ

規程 其ノ現行規程左ニ掲ルカ如シ各村組合ノ規程ハ只其ノ一例ノミヲ掲ク以テ悉ク之ヲ掲クルノ煩ヲ避ケタリ

赤穂製鹽同業組合定款

第一章 總 則

第一條 當組合ハ赤穂製鹽同業組合ト稱シ事務所ヲ兵庫縣赤穂郡赤穂町ノ内加里屋町ニ置ク

第二條 當組合ハ明治三十三年法律第三十五號重要物産同業組合法ニ依リ赤穂郡鹽田ノ地主及同製鹽業者ヲ以テ組織ス

第三條 當組合ノ地區ハ兵庫縣赤穂郡一圓トス

第四條 當組合ハ鹽質ノ改良及ヒ製産費ノ節減ヲ圖リ組合員協同一致シテ營業上ノ弊害ヲ矯正シ其利益ヲ増進スルヲ以テ

目的トス

第二章 組 合 員

第五條 組合員ハ組合ノ經費ヲ負擔スヘシ

第六條 組合地區内ニ定住セサル者ニシテ組合員タルモノハ組合地區内ニ代理人ヲ定メ組合ニ對スル一切ノ責ニ任セシムヘシ

第三章 加入及脱退

第七條 當地區内ニ於テ新ニ鹽田ヲ所有シ又ハ製鹽業ニ従事スルモノハ當組合ニ加入スルモノトス

第八條 組合員ニシテ廢業スルモノアルトキハ已ニ賦課セラレタル組合ニ關スル費用ヲ一時ニ完納スヘシ但組合ニ財產アルモノ分配ノ請求ヲナスコトヲ得ス

第四章 役員及權限

第九條 當組合ニ左ノ役員ヲ置ク

一、組長 一名 一、副組長 一名 一、評議員 十五名

第十條 組長ハ組合ヲ統轄シ組合全般ノ事務ヲ總理スルノ責ニ任ス

第十一條 副組長ハ組長ノ事務ヲ補佐シ組長故障アルトキ之ヲ代理ス

第十二條 評議員ハ組長ノ提出シタル議案ヲ討議シ及事業報告書ヲ調査ス評議員ハ組合ニ關スル事業ニ關シ三分ノ一以上ノ同意ヲ得テ意見ヲ提出スルコトヲ得

第五章 役員選舉、任期、俸給

第十三條 正副組長評議員ハ組合會ニ於テ之レヲ互選ス當組合ノ地域内ニ住スル町村公氏アラサレニハ被選舉權ヲ有セス

第十四條 正副組長ノ任期ハ四ケ年トシ評議員ノ任期ハ二ケ年トス

第十五條 評議員欠員ヲ生シタルトキハ次ノ總會ニ於テ補欠選舉ヲ行フ但組長ニ於テ補欠ヲ必要ト認メタルトキハ此限ニアラス

第十六條 役員ノ俸給ハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第六章 會議及役員會

第十七條 組合會ヲ分チ通常、臨時ノ二種トス

第十八條 通常組合會ハ毎年一月之ヲ開ク

臨時組合會ハ組長ニ於テ必要ト認ムルトキ又ハ評議員半數以上又ハ組合員三分ノ一以上ノ同意ヲ以テ本組合ノ利害ニ關シ會議ノ目的ヲ掲ケ請求シタルトキ之レヲ開ク

第十九條 會議ハ組長之レヲ召集ス

組長ハ開會ノ五日前ニ於テ會議ノ目的日時場所ヲ通告スヘシ

第二十條 組合會ノ議長ハ組長ヲ以テ之レニ充ツ

第二十一條 組合會ハ總員二分ノ一以上(他人ノ委任狀ヲ有スルモノモ加算ス)出席スルニアラサレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第二十二條 事故ノ爲メ會議ニ列スルコト能ハサルモノハ委任狀ヲ付シ他ノ組合員ニ代理セシムルコトヲ得

第二十三條 組合會ノ決議ハ出席者ノ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル處ニ依ル

第二十四條 組合會ノ議決權ハ鹽田一戸前毎ニ地主一個營業者一個ヲ有ス
第二十五條 役員會ノ規程ハ別ニ之レヲ定ム

第七章 會計

第二十六條 當組合ノ會計年度ハ曆ニ依ル

第二十七條 組合經費ノ收支豫算及ヒ徵收法ハ年度前二ヶ月ヲ限り評議員會議ノ議決ヲ經テ農商務大臣ノ認可ヲ受クルモ

ノトス

第二十八條 組合經費收支決算及業務成績ハ評議員會ノ認定ヲ經テ每會計年度後二ヶ月以内ニ農商務大臣ニ報告シ且ツ組

合員ニ公示スヘシ

第二十九條 經費不足ヲ生シタルトキハ評議員會ニ諮リ借入ヲナシ又ハ準備積立金ヲ以テ之レヲ補充スヘシ

但經費剩餘アルトキハ準備積立金ニ編入ス

第三十條 準備積立金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ又ハ有價證券ニ代フルコトヲ得

第三十一條 組合財産ハ解散ノ場ヲ除クノ外分配スルコトヲ得ス

第八章 印章

第三十二條 當組合及役員ノ印章左ノ如シ

方一 赤穂製鹽
寸二 同業組合印

方六 赤穂製鹽
同業組合
分 組合長印

方六 赤穂製鹽
同業組合
分 副組合長印

中五 長八分
赤穂製鹽
業組合印

第九章 事業

第三十三條 當組合ニ於テ施行スヘキ事業ノ概目左ノ如シ

- 一 組合員ノ統一ヲ圖ルコト
- 二 鹽質ノ改良ヲ圖ルコト
- 三 生産費ノ節減ヲ圖ルコト
- 四 採鹹及製鹽ノ方法ヲ改良スルコト
- 五 營業上ノ需用品共同購入ヲナスコト
- 六 其他鹽業ノ改良發達ニ關シ必要ナル事項

第三十四條 事務ノ細目ハ評議員會ノ決議ヲ以テ之レヲ定ム

第十章 定 款 變 更

第三十五條 此定款ノ變更ヲ要スルトキハ組合總員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ之レヲ議決シ農商務大臣ノ認可ヲ經テ施行ス

第十一章 解 散

第三十六條 本組合ノ解散ヲナサントスルトキハ組合總員五分ノ四以上ノ同意ヲ以テ之レヲ決議シ農商務大臣ノ認可ヲ得ルモノトス

此場合ニ於テ貳名以上ノ清算人ヲ選定シ一切ノ事務ヲ處辨セシムルモノトス

附 則

第三十七條 現ニ本組合ノ地區内ニ於テ鹽田ヲ所有シ又ハ製鹽業ヲ營ムモノハ重要物産同業組合法第四條ニ據リ本組合ニ加入セルモノト看做ス

赤穂西濱組合規約

第一章 總 則

第一條 本組合ハ赤穂西濱組合ト稱シ事務所辨ノ便宜ヲ圖リ赤穂支部鹽屋支部ヲ置キ各事務所ヲ置ク赤穂町以東ニ在住ノ組合員ハ赤穂支部ニ鹽屋村以西在住ノ組合員ハ鹽屋支部ニ屬ス但赤穂支部ニ於テ本部ノ事務ヲ兼行ス

第二條 本組合ハ赤穂町及鹽屋村地域内鹽田ニ於テ製鹽ヲ業トスルモノニシテ本組合ノ組合員名簿ニ登錄ヲ得ルモノヲ以テ組織ス

第三條 本組合ハ營業上ノ統一ヲ圖リ以テ共同ノ利益ヲ増進シ斯業ノ改善發達ヲ計ルヲ以テ目的トス

第二章 組 合 員

第四條 組合員ハ第三條ノ目的ヲ達スル爲メ總會ノ決議ヲ經テ業務規定ヲ設ク

第五條 組合員ハ本規約及業務規定ノ外總會又ハ役員會ノ決議ヲ遵守スル義務ヲ有ス

第六條 新規加盟者ノ加盟金左ノ如シ

一 鹽田一穴ニ付參拾錢トシ最高額ヲ貳拾五圓トス
 第七條 再加盟ヲサスモノハ前條加盟金ヲ免ス但シ相續人ハ一戸前ニ付金壹圓ヲ出金スルモノトス
 第八條 組合員名簿ハ鹽田釜家、鹽田反別、地價、穴數、氏名ヲ登錄スルモノトス

第三章 役員

第九條 本組合ニ左ノ役員ヲ置ク

理事	二名	評議員	十六名	會計	一名	代納監督	二名
信號旗同上	四名	石炭同上	四名	白米同上	三名	鹽包裝拾同上	三名

第十條 理事ハ組合ヲ代表シ事務ヲ總理シ總會又ハ評議員會ニ於テ議長ヲナス

第十一條 會計ハ金錢ノ出納及保管事務ヲ整理ス

第十二條 評議員ハ組合員ニ代リ豫算及理事ノ提出スル議案ヲ討議ス

第十三條 信號旗監督ハ鹽田人夫稼方ニ係ル信號旗一切ノ監督ヲナス

第十四條 石炭監督ハ石炭購買及上荷船ノ監督ヲナス

第十五條 理事評議員ハ支部總會ニ於テ半數ツ、ヲ選舉ス

第十七條 會計、信號旗監督、石炭監督、白米監督、鹽包裝監督、鹽代納監督ハ評議員會ニ於テ組合員中ヨリ選舉ス

第十八條 役員ノ任期ハ總テ一ケ年トス

第十九條 評議員會ノ決議ヲ以テ事務員及濱巡視人ヲ撰任ス

第二十條 本部ニ書記一名以上ヲ任用シ日勤セシムルモノトス

第四章 總會

第二十一條 總會ハ通常、臨時ノ二種トシ通常會ハ毎年一月之ヲ開キ臨時會ハ理事ニ於テ必用ト認ムルトキ又ハ評議員半

數以上又ハ組合員四分ノ一以上ノ同意アルトキハ之ヲ開ク但シ開會ハ二日前ニ其目的、事項、日時、場所ヲ通告スヘシ

第二十二條 通常總會ハ事業及決算ノ報告及役員ノ選舉ヲナス

第二十三條 總會ノ議決權ハ一人一個トス

第二十四條 總會ハ各支部ニ分チテ之ヲ開ク各支部ノ決議カ差異アルトキハ評議會ノ討議ヲ以テ決定ス

第二十五條 總會ハ總員ノ二分ノ一以上ノ出席スルニ非サレハ開會スルヲ得ス

第二十六條 事故アリテ總會ニ出席シ能ハサルトキハ委任狀ヲ以テ相當代理人ヲ出席セシムルコトヲ得

第二十七條 可否同數ナルトキハ議長ノ裁決ニ依ル

第二十八條 本章ノ規定ハ評議員會ニ準用ス

第五章 會 計

第二十九條 本組合ノ會計ハ曆年ヲ以テス

第三十條 組合經費ハ豫算ニヨリ製鹽數量ニ賦課シ毎年二月、五月、八月、十一月ノ四期ニ徵收ス但シ年度末ニ至リ實

際納付鹽ニヨリ精算勘定ヲナシ過不足金ヲ授受ス

第三十一條 組合費及違犯金其他組合ノ負擔ニ屬スル費用ノ徵收ハ鹽賠償金ヨリ控除シ鹽賠償金取扱人ヨリ納付セシム

第六章 組 合 業 務

第三十二條 組合本部ニ稼人名簿ヲ備フルモノトス

第三十三條 組合員ノ雇人ヲ變更スル毎ニ必ス事務所へ屈出ヲナスモノトス但シ稼人章ヲ携帯セサル稼人ヲ雇入ルハ得ス

得ス

第三十四條 稼人ニシテ不都合ノ事實アルトキハ理事ハ使用停止ヲ通告スヘシ此場合ニハ如何ナル事情アリトモ組合員ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第三十五條 本組合ハ石炭問屋ヲシテ理事ニ承認ヲ得スシテ組合員以外ニ石炭ノ販賣ヲナサシメサルモノトス

第三十六條 本組合ハ西濱組所屬ノ上荷船ヲシテ理事ノ承認ヲ得スシテ組合員及鹽販賣者以外ノ途運搬ノ事務ヲ執ラシメ

サルモノトス

第三十七條 石炭問屋又ハ上荷船カニケ條ノ約束ニ違背シタルトキハ理事ハ其旨ヲ組合員ニ通知スヘシ此ノ通知ヲ受ケタ

ルトキハ組合員ハ如何ナル事情アリトモ其問屋ヨリ石炭ヲ購買シ又ハ其上荷船ニ運搬セシムルコトヲ得ス

第三十八條 本組合ハ組合員ノ鹽代納ヲナス

第三十九條 本組合ハ都合ニヨリ評議員會ノ決議ヲ經テ代納者ヲ指定スルコトアルヘシ

第四十條 代納ノ取扱ニ關スル諸般ノ手續ハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第四十一條 日雇稼業方巡視方ニ付テハ別ニ評議員會ニ於テ之ヲ協定ス

第四十二條 組合員ノ鹽田ニ消費スル白米、石炭、包俵ハ評議員會ノ決議ヲ以テ其ノ取扱者ヲ定メ本組合ノ規約及細則其
他必要ノ事項ヲ遵守セシム

第四十三條 組合員ハ前條取扱者以外ヨリ米、石炭、包裝ヲ購入スルコトヲ得ス

第四十四條 本規約ニ違背シタル組合員アルトキハ評議員ノ決議ヲ以テ左ノ範圍内ニ於テ違約處分ヲナス

一、壹圓以上五拾圓以下ノ違約料 一、除名

前條項ニ依リ除名ヲナシタル組合員ハ第七條ノ權利ヲ失フモノトス

第四十五條 替持法稼方ヲ實行スル鹽業者ハ本規約ニ抵触セサル範圍内ニ於テ特種ノ事情ニ付テノミ別ニ取締法ヲ設クル

コトヲ得但シ此取締法ハ評議員會ノ承認ヲ要スルモノトス

第四十六條 鹽田ヲ小作セントスルモノハ前小作人ニ對シ交渉ヲ經サルモノハ徳義上ノ犯則者ト認メ評議員會ノ決議ニヨ
リ之ヲ處分ス

右之通り規約候也

明治三十八年十二月二十八日

二 販賣組合ノ組織規程及沿革

(イ) 沿革

藩政時代 藩政時代ニ於ケル鹽販賣ハ其ノ他領ヘ任向ケラル、モノト領地内ニ於テ賣捌カル、モノトニ依リ各其制度ヲ異
ニシ他領ヘ運漕セラルノモノヲ稱シテ沖賣ト云ヒ領地内ヘ販賣セラル、モノヲ稱シテ岡賣鹽ト云ヘリ兩者共ニ藩廳ノ監督支
配ヲ受ケ販賣上諸種ノ經營ハ殆ト當時ニ於ケル下級行政機關タル庄屋年寄等ノ手ニ依テ解決實行セラレタルコト當時製鹽上
ニ對スル諸種ノ關係ト同様ナリ而シテ其ノ組織ハ全ク株制度ニシテ中頃多ク問屋株ノ賣買行ハル、ニ至レリ
株制度ノ變遷 沖賣問屋株ハ寶永四年ノ交從來鹽ノ販賣ニ從事セル問屋ニ對シ命シテ御用金ヲ出サシム當時命ニ應シ出金

セル者ニ對シ問屋株ヲ定メテ販賣ヲ許シ以來新ニ之ヲ開始スルモノヲ禁セリ是鹽問屋カ強固ナル根底ヲ造リ以テ鹽販賣ニ對スル獨占の特權ヲ得ルニ至リタル始源ニシテ後元文ノ交新ニ問屋ヲ爲サンコトヲ藩廳ニ請フ者アリタルモ此等ノ問屋ヨリ舊慣ヲ主張シテ其許可ヲ拒ミ遂ニ新ニ問屋ノ開始ヲ容レス爾來幾十年ノ間其特權ヲ占有シ以テ明治維新ノ際ニ至レリ是等ノ問屋ハ年々御禮金ヲ納メタルノミナラス時ニ堤防ノ決潰若クハ鹽田ノ荒廢等不時ノ變災ニ際シ巨額ノ費用ヲ要スルトキハ時々御用金ヲ納メ之カ普請費ニ充テタリ而テ岡賣鹽株ハ寛政五年初メテ鹽坐ヲ置キ其取締ヲ爲シ其取扱人ヲ限定シテ一人トシ餘人ノ販賣ヲ禁止シタルニ起リ後弘化三年從來ノ制ヲ改メ更ニ之ヲ十一軒トシ且ツ地方需用者ノ此ノ取扱者以外ヨリ鹽ノ購買ヲ爲スコトヲ禁シ岡賣者ヨリハ年々七月、十二月ノ兩度ニ於テ口錢ト稱シ課金ヲ鹽坐ニ徴シタリ然レトモ岡賣鹽株ハ其後チ年所ヲ經ルニ隨ヒ時世ノ變遷自ラ其ノ制額レ今日ニ在リテハ販賣市場全ク此ノ慣行ヲ絶テリ沖賣問屋ニ對スル舊慣ハ維新ノ變革ニ際シ製鹽制度ニ關スル舊慣古例殆ト廢滅セラレタリト雖モ之カ獨占の特權ハ依然トシテ存續シ亦出テ、新ニ問屋ヲ開始スルモノアルヲ見ス是レ蓋シ地方人ノ深ク舊慣ヲ重シ猥リニ市場ヲ攪亂スルカ如キコトヲ避ケタルニ由ルヘキモ亦鹽ノ取引ハ或得意先ニ對シ又ハ運漕機關ニ對シ若クハ製鹽者ニ對シ諸種ノ關係ヲ有シ其駭引極メテ複雜ニシテ卒然出テ此間ニ處シ販賣ヲ劃策セムコトノ容易ナラサルヲ認ムルニ由ラスシハアラス此ノ如ク株制度ノ結果ハ獨リ藩政時代ニ於テ販賣上組合組織ノ要ヲ見サリシノミナラス維新後亦永ク全ク組合ナキ狀態ヲ以テ推移シ近ク專賣法實施ノ當時ニ至レル所以ナリトス販賣組合ノ創立及解散 昨三十八年鹽專賣ノ施行ハ鹽政上ノ一革新ニシテ販賣上ニ於ケル習慣亦其ノ影響ヲ蒙リ頑然舊慣ヲ墨守スル能ハサルモノアリ茲ニ於テ當地ニ於ケル問屋ハ孰レモ同盟ノ必要ヲ認メ同年五月赤穂鹽販賣同業組合ナルモノヲ創立セリ然ルニ其ノ後幾何モナク組合同盟ノ存續ハ冗費ヲ重ヌルノミニシテ多ク利益ヲ見スト唱フル一派ノ論者アリテ終ニ同年十二月ヲ以テ之ヲ解散セリ是ニ於テ販賣組合ニ關スル狀態ハ亦變シテ專賣前ノ狀態ニ復歸セリ

(ロ) 組織及規程

沿革ニ於テ叙スカ如ク現今組合ハ解散セラレ問屋各自ノ隨意行動ニ一任セリ依テ本項記載事項ナシ

三 燃料其他需用品購買組合、組織、規定及沿革

製鹽組合ニ於テ處理シ本項ニ掲クルカ如キハ從來ノ慣習併ニ現時斯ル制ナシ

第十一章 試

驗

第十二章 輸出入及試賣

第十三章 鹽田以外ノ製鹽裝置及方法

以上各章當該事項ナシ

第十四章 燒鹽

本業ノ創始ハ舊藻主淺野家時代ニ濫觴シタルモ其年代ヲ詳カニセス同家ヨリ幕府献上品トシテ製出セルモノ、外市場ノ賣買ハ頗ル僅少ナリシ而シテ其製造ハ該家ニ於テ山崎彌六ナルモノヲシテ專ラ之カ監督ヲナサシメタリ當時ニ於ケル製造方法ハ單純ナル濾過裝置ニヨリテ赤穂鹽ヲ再製シ之レヲ模型ニ詰ノ堅固ノ状態トナシ更ニ丸瓦ニ入レ普通ノ製鹽竈内ニ於テ燒ケリ降テ藩主森家ニ至リ移シテ民間事業トナシ宮崎元治先代清次郎之ニ從事シタリシ其燒竈ハ鹽田附屬ノ製鹽竈内ニ於テ燒キタリト云フ然ルニ明治二十七年日清戰役ニ際シ軍需品トシテ多量ノ製造方ヲ山崎安吉、宮崎元治ノ兩人ニ命セラレシニヨリ其製造法ノ改良ヲ施セシモ未タ充分ナル精品ヲ製出スルコト能ハス明治三十七年日露戰役ニ際シ軍需品トシテ該品ノ製造ヲ宮崎元治ニ命シ製品ノ鑑査ハ極メテ嚴密ナリシカハ製造ノ規模ヲ擴張シ製造所ヲ三ヶ所ニ設ケ盛ニ之レカ製造ニ從事シ製產高巨額ニ達シ製品モ亦敢テ外國鹽ニ劣ラサルノ改良ヲ觀ルニ至レリ燒鹽ニ用ユル原料トシテハ從來赤穂鹽ヲ再製シ之ヲ用ヒタリシモ苦汁ノ除却充分ナラス從テ製品ノ色澤ヲ損セシニヨリ近來臺灣鹽ヲ再製シテ使用スルニ至レリ蓋シ臺灣鹽ハ天日製鹽ナルヲ以テ内地鹽ニ比シ苦汁ヲ含有スルコト少ナク唯砂塵ノ混有セルヲ以テ汚色アリト雖トモ其ノ成分ハ遙カニ内地鹽ノ上位ヲ占ムルカ故ナリ今其ノ製造方法及順序ヲ記スルニ當リ先ツ其再製方法ヲ記述シ亞テ燒鹽ノ製造順序ニ及ハントス

再製方法並ニ順序 原料鹽ヲ再製スルニハ先ツ濾過裝置ニヨリテ鹹水ヲ造リ之レヲ煎熬製鹽ス

濾過槽ハ高サ四尺乃至五尺ノ桶ヲ用ヒ其ノ槽底ニ木炭ヲ充填シ更ニ砂礫細砂ヲ容レ其ノ表面ニ蓆ヲ掩フ而シテ其ノ蓆上ニ原料鹽ヲ容レ之ニ淡水ヲ注加スルヲ以テ原料鹽ハ溶解シ漸次槽底ニ降りテ流出口ニ出ツ是ニヨリテ得タル鹹水ヲ更ニ同裝置ノ第二第三槽ニ移シ濾過流出シタルモノヲ鹹水溜ニ流下セシム此鹹水ハ全ク無色透明ニシテ比重母氏貳十三四度ナリ(別圖參照)前記ノ鹹水壹石三斗ヲ煎熬釜ニ移シ煎熬スルトキハ其製鹽量四斗内外ニシテ一晝夜十二三回トス故ニ一日ノ採鹽ハ五石内外ナリ其ノ採鹽ハ之レヲ散鹽貯藏場ニ堆積シテ苦汁ヲ滲出滴下セシムルコト一晝夜斯クシテ得タル精鹽ハ即チ再製鹽ナリ是ニ用ユル釜ハ鑄鐵ニシテ其大サ大抵長サ八尺幅六尺深サ四寸之ニ附屬スル温釜ハ一個ニシテ普通製鹽用ノモノト同一ナリ竈ハ粘土ニテ築造シ十州一般ニ行ハル、製鹽竈之ゝト異ナルコトナキモ該竈ハ煙突短ク從テ通氣作用頗ル緩漫ナルヲ以テ焚

火口ヨリ逆出スル煤煙ハ常ニ飛散シテ製鹽ノ色澤ヲ汚損スルコト甚シキニヨリ焚火口ノ上部ニ土管若クハ鐵板ヲ以テ小煙突ヲ設ケ之レヲ高く釜屋外ニ突出セシメ其ノ下部ハ長方形ノ漏斗狀ヲナセル覆蓋ニヨリテ逆出セル煤煙ヲ屋外ニ放散セシムルト共ニ釜面上ニ蓆製ノ天井ヲ張り焚火口ト釜ノ境界ヲ板壁ニヨリ分割シ且ツ攪拌口ヨリ竈内ノ石炭ヲ攪拌スル毎ニ焚火口同様煤煙ノ逆出スルモノヲ防止センカ爲メ焚火口ト同形ノ覆蓋ニヨリ土管若クハ鐵管ニヨリテ之レヲ焚火口上ノ長方形漏斗狀ノ覆蓋内ニ導キ之ニ接續セル煙突ニヨリテ共ニ外方ニ逸出セシムルノ裝置ヲナセリ

燒鹽製造方法及順序 再製鹽ハ其ノ色澤純白ニシテ苦汁ヲ含有セサルモ尙水分ヲ包含スルヲ以テ之レヲ除却スル爲メ炮烙中ニ入シ攪拌シツ、文火ニテ乾燥セシム而シテ其ノ乾了セルモノヲ桶(高一尺徑八寸)ニ取り之レヲ石臼ニ移シ攪拌シツ、踏杵ニテ搗クコト約二十分間其ノ粉碎シタルモノヲ燒鹽ノ原鹽ニ充ツ

燒鹽ニハ需用者ノ嗜好ニ應シ諸種ノ形狀アルヲ以テ各種ノ摸型ニ原鹽ヲ充填シ木槌ヲ以テ充分壓迫シテ堅固ナラシメ摸型ヲ去リ之レヲ板面上ニ並列シ後乾燥器ニ容ル、コト三時間乃至六時間許ニシテ土器ニ(別圖參照)赤穂真鹽ヲ布キタルモノニ並列シ其ノ周圍ニモ亦赤穂真鹽ヲ以テ包圍シ之レヲ燒竈ニ投シ竈中ニ置クコト約一時間ニシテ取出シ冷却ノ後周圍ノ真鹽ヲ取除キ固形燒鹽ヲ製了ス又粉狀燒鹽ヲ製スルニハ土器内ニ原鹽ヲ詰メタルモノヲ前同様燒竈内ニ灼熱シタル後之レヲ取出シ白ニテ粉細シ絹篩ニ懸ケ瓶若クハ鐵葉罐ニ容レ販賣ス左ニ前叙ノ器具構造、形狀等ヲ記述ス

一 乾燥用炮烙及其火爐 火爐ハ煉瓦ヲ以テ造リ焚口風口ヲ具ヘ其形狀別圖ノ如クシ之レニ四個ノ土製炮烙(徑一尺九寸)ヲ架シ攪拌乾燥セシム

二 足踏臼 足踏臼ハ石製ノ臼(徑一尺貳寸深約一尺)ト木製ノ杵トヨリナリ其ノ形狀別圖ノ如シ

三 摸型 摸型ハ木ニ各種ノ形狀ヲ凹彫シタルモノニシテ人物山水動物等アリ而シテ其ノ形態ヲ有スルモノニアリテハ二個ノ摸型ヲ相合シテ之レヲ用ユ軍需用固形鹽ハ幅七分厚サ三分五厘長サ一寸四分ニシテ製了ノ重量三匁二分トス

四 乾燥室 固形燒鹽ハ乾燥不充分ナルトキハ之レヲ燒竈ニ容ルルモ製鹽佳良ナラサルヲ以テ本室ヲ使用ス其構造ハ煉瓦ヲ以テ築造シ木製ノ戸扉ヲ有シ室ノ中央ニ旋風器ヲ具ヒ之レカ回轉ニヨリテ室内ノ熱空氣ニ波動ヲ起シ以テ上下蒸發力ノ均一ヲ保タシメ併テ乾燥ヲ迅速ナラシム而シテ其ノ左右ニハ乾燥物ヲ並列スヘキ數段ノ棚ヲ有スル杵車ヲ軌道ニヨリテ

出入セシムル装置トス旋風器ノ下部外面ニハ焚口ヲ設ケ火焰ハ孤上ノ鐵板下ヲ通シテ室ノ後方ニ出テ煙突ニ逸散ス其ノ形狀別圖ノ如ク燃料ハ石炭ヲ用ユ

五 土器

土器ハ幅約四寸長サ約七寸高サ三寸ニシテ當業者ハ之レヲかわらト云フ赤粘土ヲ煉リ適宜ノ高サトシ巾一尺長サ一尺二寸トナシ麻ノ細絲ヲ用ヒテ厚サ二寸位ニ切斷シ之ヲ箱形ノ木型上ニ置キ兩邊ヲ折曲シ他ノ兩邊ニハ更ニ粘土ヲ固着セシメ木片ニ砂ヲ付シテ打敲キ箱狀トナシ木型ヲ抜キ取り乾燥セシム而シテ土器ハ一回毎ニ不用ニ歸スルヲ以テ之レカ製造ハ燒鹽工場ニ於テス(別圖參照)

六 燒竈燒竈

ハ粘土ヲ以テ造リ其ノ形狀別圖ノ如ク前後ニ三十二個ノ窓ヲ備ヘ一窓ニ土器二個ヲ容ル、ニ供ス故ニ一竈ニハ同時ニ六十四個ノ土器ヲ收容ス而シテ上段一及ニニ置キタル土器ハ漸次高熱ヲ加ヘンカ爲メ下段ニ移ス窓ニハ四個ノ小孔アル粘土蓋(巾九寸五分高六寸)ヲ嵌入シ同作業中ハ細砂ヲ以テ之ヲ塗閉スルノ裝置タリ

竈ハ楕圓形丘狀ニシテ長徑九尺短徑三尺高四尺五寸内部ハ粘土(長一尺五寸巾三寸八分厚二寸四分)ヲ以テ棚四段ニ區劃セラル又其ノ上段ヨリ最下段ニ至ルマテヲ前後兩面ニ分隔シ底部ハ共通トナリ其ノ左右脚部ニ火口ヲ備ヘ地盤面ヨリ一尺餘ヲ掘リ下ケテ薪材ヲ燃燒セシメ其火焰ヲ竈内ニ擴散セシム

第十五章 再製鹽

一 再製鹽製造裝置方法 再製鹽製造トシテ特ニ之ヲ營メルモノナク燒鹽ノ原鹽用トシテ臺灣鹽ノ再製ヲナスモノアルノミ而シテ其製造裝置方法等ハ第十四章ニ於テ説明シタルヲ以テ之ヲ省略ス

第十六章 鹽田ノ地價等

一、地價 一反當				二、時價 一反當				三、小作			
等級	鹽田	田	比較 ^{△低} _{高低}	等級	鹽田	田	比較 ^{△低} _{高低}	等級	鹽田	田	比較 ^{△低} _{高低}
上	八〇,三〇〇	八〇,〇〇〇	三〇	上	三七〇,〇〇〇	二四〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇	上	三,一三五〇	二,六〇〇	九七五〇
中	六〇,〇〇〇	六〇,三〇〇	△三〇	中	三〇〇,〇〇〇	一八〇,〇〇〇	一一〇,〇〇〇	中	二,四四〇	一八,〇〇〇	六,四一〇
下	三九,五〇〇	三六,九三〇	二,五七〇	下	一三〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇	下	一,五七八〇	一三,〇〇〇	三,七八〇